

953

孫

西遊記

卷五



繪本西遊記卷之五

目錄

前章之讀次

二僧蕩怪闢三龍宮

郡聖除邪獲寶貝

刑棘嶺悟能努力

木仙庵三藏談詩

子猷去世知音少

巨古留名翰墨場

妖邪假設小雷寺

四衆皆遭大厄難

諸神逢毒手

極三救陀羅神性穩

脫三離汚穢道心清

朱紫國唐僧論前世

孫行者施爲三折肱

心主夜間修藥物

君王越上論妖邪

妖魔寶放烟沙火

悟空計盜紫金鈴

行者修名降怪

觀音現像伏妖王

盤絲洞七怪迷本

濯垢泉八戒忘形

佛因三寶恨生災毒

心主遺魔幸獲光

庚傳報魔頭眼

卷之五目錄畢

繪本西遊記卷之五

前章之讀次

五

此物言小雷寺常空寺中一在唐僧守護之處的諺神金剛揭諦六甲六丁一十八位的護法伽藍來與牛魔王不啻或思けん再度與の本相を顯し翠雲山お逃歸り芭蕉洞

入門を堅く閉し敢て出る事あし此時列位の天神行者と俱に追來り翠雲山を取圍み洞の中一隊來る者あり是八戒と土地神們陰兵を挾領此處お押詰る行者

さ孤あり火を放て洞中を盡般焼捨たり此處も又牛魔王が巢穴ありと聞つるも是をも尙打破り捨んと思ひ土地神と諸俱お故意々々愛まで來しあり行者曰く此處羅刹女が巢穴よし

て芭蕉洞と云あり牛魔王今此裡お逃入たり吾們早く俄入んと云バ八戒も心得たりと剛個一齊お鉄棒釘鉞を擧展て洞門を打破る牛魔王の羅刹女は遂て行者と戦ひの光景を説話居る處

も行者八戒亦門を打破しと聞て大いお怒り寶貝を口より出し羅刹女は付與二口の劍を擧提門外は跳り出再度行者と八戒を相敵お做五十余合を戦ひける列位の神兵們牛魔王を取圍み

漸々又攻寄る牛魔王四面八方都て敵おして逼へき道無を怕れ雲に乗て天を昇る爰又托塔
 天王哪叱太子照魔鏡を把て空中に立牛魔王静ま來れ我門如來の佛勅を受けて爰來て你を待
 事久し牛魔王照魔鏡お照されて又忽ち大白牛と成て角を將て尖的かゝる李天王劍を振て少
 時戦ひ居るふ處は行者八戒雲を分て趕及到る哪叱太子兩個お向ひ吾門來て大聖等を援て牛
 魔王を退治す當今其功を見べしと云より疾く彼白牛の背お閃りと飛乘火輪兒を把て牛魔王
 が角の上お打越口より眞火を噴下るへバ忽ち火焰焔々と燃昇り牛魔王が身を焼けれバ牛魔
 王苦困叫び頭を振尾を搖し又變化して身を遁んと狂けれども李天王の照魔鏡お照されて再
 度變る事能ず今の通るゝ計東盡て天王我一命を助るへ我佛道歸依すべしと叫びければ哪叱
 太子曰く你命惜バ快く芭蕉扇を遞與べし牛魔王曰く芭蕉扇は我渾家羅刹女預置たり
 哪叱太子是を聞て急ぎ縛妖索を以て牛魔王が鼻穴へ串住し悟空們と諸俱は翠雲山お到り芭
 蕉洞お推寄る牛魔王聲を發て夫人早く扇を持來りて我命を助よと呼りければ羅刹女の驚さ
 急ふ扇を把て門外へ走り出頭を地お當て拜伏し天神吾們夫婦が罪を免忍るへ當今扇を孫叔
 お借て其功を助べしとて芭蕉扇を指出ければ行者儘皆受取て列位の神兵佛兵と諸俱は三藏

の居るふ處へ急ぎ行却説三藏と悟淨は行者が音信を待居處よ看々祥雲虚空は滿波り瑞光忽
 ち滿地を照す三藏是を見て怕れ戦ひ悟淨你彼を見よ那里より許多の神兵來るあり悟淨是
 を能認得て師父怕れるふ事おのれ是の如來の勅およりて常お師父を守護するふ處の四大金
 剛金頭揭諦六甲六丁護法伽藍牛を牽し哪叱太子鏡を把し托塔天王李天王大帥兄の扇を
 持二師兄の土地神と後よ導ひ其餘の都て護衛の神兵也三藏聞も敢ず見塵帽子を頂き金襴の
 袈裟を帶地上お拜す此時諸神降り四大金剛三藏は向ひ曰く我門佛勅を受來り汝が難を救ふ
 あり你力を尽して大願を成就せよ必ず怠慢事おられ三藏頭を地お着て弟子何の徳有りて尊
 聖の降臨を惠るるとる事太も畏く侍ひぬと幾度り拜謝するふ斯て行者は芭蕉扇を把て火焰山
 は近着力を極て一度煽ハ平々として火焰やみ再度煽ハ蕭々として清風を發す三度煽ハ黒雲
 四方お起り霏々として細雨を降す三藏炎熱の氣を忘れ頼ち心清々たり此時四大金剛托塔天
 王父子其外諸位の神兵三藏は別れ牛魔王を牽立て天上よ還るふ土地神の羅刹女を引居て一
 邊又伺公すれバ羅刹女拜伏して曰く大聖功終ての上の扇を我お給りて身を治め性を養せる
 へ行者曰く我聞此山火治ると雖も五穀植る後又火焰發るとや今怎麼せば火の根を除き

此處の生靈をして安く性命を養しめんや羅刹女が曰く火根を除んと欲は列て四十九扇焔
時の永世火發る事有べりらず是を聞て行者扇を把て列て焔ごと四十九扇乍ら涼々として大
雨降り終は火根消滅して永々火焔發る事なく地方の生靈安穩ある事を得たり行者扇を羅刹
女に返り羅刹女の拜謝して洞を歸り静し身を脩行して後竟お正果を得たりや斯て行者が
黨們三個の三藏を馬に乗進せ土地神を禮を施し別れを告身休涼々として足下滋潤たりけれ
ハ些少の煩もなく終は八百里の火焰山を越尙西方に向ひて急ける

懸垢洗心唯掃塔

縛魔師正乃修身

去程は三藏師徒の火焰山を越て極西方は急ぎるへ早秋も暮冬の首は推移り忽ち一座の城
地有處は到る三藏の曰く是必ず一國の王城あらん吾們城に入て圖文を換べしとて馬を前め
て行るふ六街三市寶を列ね財を積人の衣冠を正うして光景式だ爽りあり爰は十餘人の和
尙有て家々の門は立經を讀經を乞三藏此和尙們を見は怪じべし都て皆首枷手鎖を入たり三
藏嘆息して曰く兎死る時の狐悲しむと云り獸すら尙其類を思ふ我も同ト沙門の身もて怨生
彼を見て悲まざらんやと行者は命じて其謂を問しめるは悟空彼和尙們は向ひ你們何方の抄

門もて又何等の罪有て斯ごとく首枷を蒙りたるや彼和尙們跪下て曰く此處は金光寺と号す
寺あり吾僧の其寺に居住する處の沙門候ふが今屈冤の難は偶て斯の如く苦み候ふ行者
又其仔細を訊れば和尙們が曰く此處の談話すべき處はわらず列位吾荒山は來りるへ一因は
一夜の御宿をも勤べし二因は我們が困苦をも談話侍のん三藏師徒は是と違ひ和尙們と打
連て山門は到りるへ門は一扇の額あり勅建護國金光寺と云る七因の金字を鐫付たり三藏
門を入て正殿にお到り佛を拜し方丈に入るへ柱の下は六七個の和尙を縛めて首枷手鎖を入
置たり三藏深く疑ひ怪み且悲みお堪ず嘆息して居るふ處は衆部の沙門三藏の前は拜伏して
曰く尊師徒は問奉る事あり列位の尊相貌此國の人非ず尙や東土大唐より來らせんふ聖
僧のハ慘座すや三藏の曰く諸の你等徳廣大おして先知の法わり能吾們が本國を悟り知たる
や衆僧の曰く我們先知の法おしと雖も屈冤の罪を受けてより以來是を清むべきの方便なく只
管天地は歎き訴へ祈りしは昨夜不思議の夢を見たり那里よりとも知ず聲有て東土大唐の聖
僧を頼ば你等が屈冤を分明得て性命恙かかると告る者あり今朝夢覺て憐れ此事を語り
合樂く思ひ何日の唐朝の聖僧は逢參する事有んと増々心は所る時節今老師父來りて吾們

身を仔細に問ふ。昨夜の夢と符合せり。此故は唐朝の聖僧と悟候ふ。あり三藏曰く。川ち我
 們東土大唐より西天に到り佛を拜し經を求る。玄奘三藏と云。沙門あり抑々此國に怎麼ある處
 として。你們何の故に冤屈を蒙りたるや。備細に説話さふらへ。衆部の僧拜伏して告げる。此國
 の祭賽國と号て西天へ行大路あり。我金光寺の原來一箇の金塔あり。國王の先祖一箇の寶貝の
 佛舍利を塔の頂に納るる。此故に命塔の頂上より祥雲常々發露瑞雲高く升る。夜は金光を
 放ちて十方を照し。晝に彩霞を噴て遠近を仰る。あし于茲於て四方の諸國より此國を天府
 神京と唱て。個々貢物を捧げ臣と稱し來り伏す。其故は繁昌年々増り行處に思わざり。三年
 以前八月朔日の夜天より血を降し。彼黃金寶塔を汚し。夫より後會て祥雲瑞雲發露事なく。外國
 是を見て國政衰へたりと云て。朝貢を捧げず來朝する者もあし。列位の大員是を見て。此寺の沙
 門塔中の寶貝を盗み外國へ賣渡したる。故斯の若く祥雲發露するありと。奏問す國王の昏君ふ
 して更は理非をも辨る。あし忽ち吾們を召捉る。ひ百般と拷問し。或は鞭打攻可貴寶貝の有處
 を訊るふ。雖も我們更は知ぬ事なれば。自首すべし。謂れあし。故に帝王怒りる。ひ斯の如く首
 枷を入られ手鎖を蒙りて。苦む事三年。及び死者過半あり。万望に聖僧廣く慈悲を述。法力を

施して我們が性命を救ひる。三藏聞て。然様の暗の如くある事。吾も又怎麼ども做難し。然と
 雖も我長安を出し。時一箇の誓を發し。寺に偶に佛を拜し。塔に遇はば是を搦んと言たり。今日此處
 へ來り。屈冤の僧に逢。原是寶塔より發りたる事なれば。我今沐浴して。新ある符を求め。塔に登り
 て。是を搦ひ。尙方便のあかる事あらば。國王を奏して。你們が冤屈を明め。關文を換て。西天へ赴く
 べし。衆部の僧大いに喜。怡拜伏して。夫より茶飯を献せて。三藏師徒を款待けり。既は天晚よ
 及びければ。三藏急に沐浴して。新ある符を把短き衣を着て。準備われ。行者師父を執止め。彼塔
 上血を降して。汚せりと聞何ぞ怪氣ありらんや。老孫師父と俱に。行はば怎麼三藏大に喜。ひ行者と
 打連て。塔を開き。符を把て。一層一層。是を搦ひ。第七層に到る時。既は二更の頃。及び三藏身体
 大いふ勞れ。行者は向ひて問ける。此寶塔高き何程あるや。行者曰く。十三層の高さあり。三藏
 の曰く。長安を出しより。以來未だ斯る數層の寶塔を見ず。我今身心勞れぬ。と雖も。勤て是を搦ひ
 竟り。本願を果すべし。と又三層を搦ひ。終に十層に到りて。伏倒れ。腰膝股脚れ。進退極りて。勤
 く事能はず。悟空を呼で曰く。你今より我に代りて。殘る三層を搦ふべし。行者命を受けて。符と請取
 暫時。二層を搦ひ。終に第十三層に到れば。爰は何箇に在て。談話の聲す。行者怪く思ひ。斯る塔の

頂上ふ人の登るべき謂れかし必定妖怪の處爲あらんと終小等捨て塔の窓より潜り出て雲を踏で伺ひ見よ第十三層の塔中よ二個の妖怪對座て拳を打酒喫居たり行者鉄棒を把て塔門を遮り大いふ叱て曰く你奈何ある妖怪みれば塔中の寶貝を奪ひふるや彼妖怪是を聞て慌忙驚き駈出んとする處を行者塔門よ立て敢て逃さず飛入て捉んとすれば妖怪の塔の壁に拽着て動き得ず只管叫んで曰く吾命を助けるへ我門が知たる事あり非すと云行者件一孤獨み第十層まで拽下し三藏の前よ引居師父彼寶貝を偷みたる妖怪を捉へると呼りければ三藏此時座睡して居るひしが此聲よ眼と開きて曰く你何處より捉へるとし行者曰く我師父よ代りて塔を掃ひ十三層小到る處よ此妖怪拳を打酒を喰ひ居るとし故則ち捉來りしかり三藏喜んで妖怪よ向ひ你の那里より來りし妖怪よて寶貝を盗み何處へ隠し置るるぞ具よ自首いふすべし妖怪ども戰々兢々我門の乱石山碧波潭の万圣竜王が遣す所の塔を護るの官人あり一個の奔波兒霸と云て鮎魚の妖精あり一個の奔波兒奔と号て黒魚精あり我万圣竜王獨の娘を持名を萬聖公主と云頗る花月の容貌あり向年九頭附馬を諱とす竜王喜びよ塔す彼夫婦を慰んと世よ稀る寶貝を請る所此金光寺の佛舍利の事を聞出し三年前の秋の頃

爰よ來り塔の上ふ血を降し金塔を汚し終佛舍利を奪ひ取又大羅天上よ到り靈虛殿よ忍び入王母娘々の九葉の靈芝艸を盗み公主よ與へ宮中よ深く隠し置ぬ此故よ二品の寶貝の金光彩霞を放ち寶よ妙ある光景あり然るよ近頃三藏といふ者在て西天よ到り經を取んとす渠が徒弟よ悟空といふ者あり専ら人の惡事を糺し正を扶け邪を罰すと聞渠尙愛よ來り寶貝を索する事も有んや尙然事有べ趁早よ告知せよとて吾門兩個を遣しふるあり行者打笑ひ彼輩者向 日牛魔王を呼で筵宴をあしつるが這斯も又箇様の惡事をあすや我件一よ詮議をすべし此時八戒二三人の和尙よ燈燭を照せ塔上よ登り來り師父塔を掃ひ畢らば疾く歸り安歇るへ爰に在て何を説話するふや行者聞て能處へ來りたり彼寶貝を盗たるの万圣竜王あるよし當今此妖怪が自首よ及びたりと首尾を説ければ八戒聞て妖怪を捉たらば那ぞ早く殺さるや行者曰く少時渠們を生しおき國王の前よ引出し其照驗と做て後渠們を路開として偷圖を捉寶貝を把返さん八戒尤ありとて行者と俱よ個々妖怪を搦捕み和尙們と連て三藏を助け塔を下りて寺中小歸れば衆部の僧出迎へて此事を聞て大いよ喜び勇みける行者鉄索を以て彼妖怪を縛め琵琶骨を穿て再び變化する事を免さず衆部の沙門よ命じて護しむ沙門等妖怪

を一室の裡に推籠殿く保守て夜明ふ及ぶ斯て三藏の行者を伴ひ金光寺を立出て王城に到り
 黄門官に見え禮を正うして曰く我々の東土大唐より西天に到り經を求むるの僧あるが今日
 大國に來り國君に見ゆて關文を換へん事を願ひ侍ふ大人宜く是を傳奏し給へ黄門官斯と國王
 又奏聞す國王是を聞て三藏師徒を宜入るへハ三藏の行者と俱に階前ふ到り山呼の禮終りけ
 れハ國王三藏を殿上ふ召て座を給ふ三藏の關文を捧けれハ國王是を採て讀終り三藏を顧て
 曰く你が大唐王より高僧を選み路の遙かるをも厭ず佛を拜し經を求しむ我國の沙門は専ら
 盜道を志し國を傾け君を廢す三藏其故を問ハ國王の曰く金光寺の僧金塔の寶貝を偷得より
 以來諸國更に來朝せず吾深く是を恨とす三藏是を聞て曰く階下誤て罪なき金光寺の僧徒を
 苦困るふ彼寶貝の乱石山碧波潭の万聖龍王が盜し處あり昨夜貧道塔上にて二個の妖怪を捉
 候ふ國王驚いて其故を問三藏謹んで首尾の動靜を仔細語り給へハ國王大いに喜び然らハ今
 より武官の命下て妖精を捉來らすべし三藏の曰く武官を用ひるふ及ばず貧道が大徒弟よ
 孫悟空と云者よく妖魔を伏し候ふ万般他は命下るはハ決て過失無るべし國王聞て其大徒弟
 今那里に在や三藏行者を呼るへハ行者進み出て國王に見ゆ國王行者が姿を見て是凡体なら

すと思ひ願て彼妖怪を捉來るべきよしを命じ給ふ行者領掌て階前を退り金光寺に到り八
 戒悟浄を命下て妖怪を一個つゝ拽出させ三藏打連て城中に到り二個の妖怪を階前ふ扣居け
 れハ國王首め文武の百官彼妖精を見よ一個の尖りたる鬚荒たる牙利よしして甲黒く是則
 ち黒魚の妖精あり一個は皮滑よしして腹大きく口黒くして鬚長く是則ち鮎魚の妖精あり足
 ありて能歩行大體ハ人の形に變化たり國王始終の事と訊るへハ二個の妖怪仔細は是を自首
 す國王顧て金光寺の僧を殘さず教されたり然して殿上は筵宴を設け三藏師徒を厚く接待
 王又謂て曰く何れの沙徒弟ありとも央み彼竜王を亡し寶貝を把返したく思ふあり願くは師
 父是を免んや三藏の曰く悟空と八戒兩個命じ候はハ行者八戒進み出て國王に向ひ吾門二
 個駈向ひ彼妖怪を亡し寶貝を把返し來るべし國王曰く你們何程の人馬を用ひて妖怪を捉る
 や八戒が曰く那ぞ人馬を用るに到んや我酒を喫飯を喰ひ剛兄と俱に駈向はハ手の下に彼竜
 王を捉ふべし國王大に喜び嚮に捉し二個の妖怪をして路開かせ給へハ行者八戒乍ら雲に打
 乗て那里ともなく飛去けり國王初め衆位の官人とも大いに驚き天に向ひて拜を志し三藏を
 老佛と唱へ悟浄を菩薩と稱し口管恭敬かしづさけり

二僧蕩怪闢魔

群聖除邪獲寶貝

行者八戒の二人は乱石山碧波潭に到り彼二個の妖怪に謂て曰く我等先へ行て竜王に告すべ
 きには我の是聖天大聖孫悟空あり金光寺の寶具を奪返さん爲に來れり趁早に返さば竜王の
 命を助くべし倘些少にても遅らば水中に打入て悉く塵に倣べきあり疾此由を龍王に
 告て寶具を返せよ其代りに你們によき餓別を取すべしと鉄棒を把出して口より仙氣を吹り
 け一箇の戒刀とあし二妖の耳と鼻を剝落し水中に投入ければ二個の妖怪不思議に命を助り
 疼を忍びて宮中へ駈返り龍王の前に走り出大王大事ありと呼りけり老竜王と九頭
 驕馬と筵宴を催し在けるが是を聞て何事あるぞと訊るに兩箇の妖怪首尾を仔細語り當今
 かの孫悟空金光寺の寶具を奪返んとて嚴く吾們を攻阿耨侍ふありと告ければ竜王一度孫悟
 空の三字を聞より大に駭き戦々兢々騒ぎければ九頭驕馬是を見て大いに笑ひ大岳煩惱しる
 ふる我幼き時より武藝を學び四海の豪傑と交りを結ぶ那ぞ彼弱馬温を怕れんや我今彼悟空
 を掴み來るべしと一口の月牙鏢を把て水面を跳出大いと呼つて曰く彼弱馬温何れも在や
 我金光寺の寶具を盜たりとも汝が管る事あらず怎生吾小の疵付たるや趁く來りて我手

列を見よ但し你等吾威勢も怕れて腰の抜て來ぬうと大音を響りける行者大いお怒りを發し
 汝寶貝を盜で金光寺の僧侶を苦困しむ我等同ト沙門あり那ぞ余處も見捨んや且又今の惡
 言聞捨たし死を知ぬ鉄子よと鉄棒を水車に回して打てのゝる九頭驕馬も戦を振つて既り
 蒐り兩個乱石山の中又在て三十余合相戦ふ八戒釘釘を打振て行者を助けて戦ひければ九頭
 驕馬當がたく空中に飛昇り本相と顯しければ九箇の頭有て其形の兇惡あると見て八戒怕れ
 て逃んと倣を驕馬の妖怪翅を伸て飛係り八戒が鏢を引掴み水中へ投入たり斯て妖怪原の
 姿も變化して龍王の前にお到り八戒を地上にお投着夫婿めよと呼りければ衆部の小妖的走り倚
 て八戒を細縛ける老龍王大い喜び驕馬どの功績々々と稱揚し酒を斟めて勞を歇しむ此時
 行者の八戒が生擒れたるを見て急亦蟹と變じて水裡に潜り入原來此處の牛魔王と戦ひし
 時來りて路開のよく知たれば立地も宮裡も道登り彼是と伺ふ處も許多の小妖的集りて遊び
 居處あり行者近く這よりて向ふ附馬大人の捉來りるひし宵の長き和尙の未だ死すして在や
 と問ければ小妖的の曰く未だ死す則ち廊下も在行者聞て頓て廊下にお道到り見れば八戒の柱
 小縛細られて在四方も人語あきを伺ひ終り縛細を咬斷ける八戒繩を抜出て大お喜び師兄我

釘鉞を這斬り取れたり。恚麼して拿返さん行者。是を聞て你一邊隠れて少時待べし。我穿探て取來らんとて。隱身の法を行ひ宮中へ入て伺ひ見。彼方釘鉞を立のけ置たり。行者密に奉とり八戒が隠れ在處へ歸來り釘鉞を遞與ければ八戒大い喜び。即兄且水面へ出て待る。我彼妖怪を偽引出さん。其時師兄彼を打殺せ。行者點頭心得たりと。竟水面へ走り出て待候ふ。八戒は釘鉞を把て宮裡へ跳り入。桌椅家火の類ひ盡般打碎く。老龍王と九頭驢馬の事の急ある。狼狽廻り何の差別なく。唯逃昏乱て騷動す。八戒の手をも止め。四面八方へ打て廻る。恰も無人境に入。若し龍王と驢馬の漸々。心を楚め手も利鋒と撃つて。衆部の水怪竜子。龍孫を従へて八戒獨を取圍む。八戒も戦ひて時分を見合せ。逃出る妖怪どもは。逃さじと水面まで追來る。待設たる行者。鉄棒些少も猶豫す。跳りかゝつて。老龍王が頭を打。熱柿の若くは打破られ。腦水滾々て死たり。けり九頭驢馬の勢ひの善らざるを見て。敢て戦はず。龍王の死骸を収て。水裡へ歸ける。行者八戒も。又是を追ず。岸の一邊へ座て。少時歇み居たりける。斯る處。東の方より狂風滾々と。鼓り南を指て行ものあり。行者頭を擧て伺ひ見。二郎顯聖領梅山六兄弟。と鷹を居。犬を牽雲霧。隨ひ行る。悟空八戒も。向ひ你彼を看。彼七聖兄弟。あり倅候ふ。當今央みて我等

が力を助しめん。八戒聞て是然るべしと。急雲を打乗空中へ。追到り真君少時車馬を止める。我等兄弟爰に在て見へ奉り度。幹あり二郎真君是を聞て。八戒と打連康張桃李郭直の六兄弟を引奉りて。降り來りて行者。お見ゆ。行者禮を行ひて。首尾の動靜を語り。万望の真君力を助る。二郎真君是を聞て。我等今日。繼ふ出て此處を。過り倅候ふして。大聖兄弟も。見ゆ戦ひを助よと。央る。權春那ぞ。是も過ん今より力を添て。妖怪を退治すべし。八戒が曰く。我且水裡へ討入て。妖怪を偽引出し來んとて。釘鉞を撃て。又水裡へ潛り入宮裡へ。飛込ければ。龍婆龍子龍孫等の龍王の死骸も。取若敷き。臥て前後を覺す。九頭驢馬一邊に在て。棺材を取納て。爰も八戒が來ると。知す八戒忽ち龍子を捉て。唯一突。突殺す。龍婆大い驚き。彼命尙又來つて。我子を殺せりと。叫びければ。九頭驢馬を。奪て龍孫と。俱も八戒も打てり。くる八戒又戦ひ。負て水面へ。逃出る妖怪ども。の通さじと。潭の邊まで。追りけ來る。一邊に隠れ在し。二郎七星大聖と。俱も跳りいで。刀鎗を懸して。電光の若く。伐立ける。お龍孫の五鉢。微塵も切碎り。立地も死たりける。九頭驢馬を見。て本相と。顯し九箇の頭を。伸て翅を。渡り飛廻り。件一も喰ひ殺んと。勳さける。二郎真君金弓も。銀彈を。挿み妖怪を。劈ひ切て。放て。過たず。右の翅を。射申たり。妖怪翼を。射破れて。山に半腹も。落ける。

忽ち又頭を伸て二郎真君を喰んとする異君の犬と鷹飛保つて是を噛碎く妖怪増々大蛇と
 負たれバ今力も弱り果命一固を助らんと去方去らず逃失ける八戒是を追んと爲を行者捕
 住め窮寇の追事ありれと云り寶貝さへ取返さバ道断と殺す及ふべりらす我今謀計を以て
 寶貝を拿返し來るべしと忽ち九頭驃馬が容と變じ八戒を引領水裡に潜り入宮中に駈入れ
 万聖公主出迎て眞の夫と思ひ吾君怎生慌忙て歸りるふや行者曰く彼八戒今又爰に來るあ
 り你早く寶貝を拿來れ我深く藏し置べし公主事の急ある小猥猥行者が化たるも悟らず
 て一箇の金匣子を取出し是のこれ佛舍利あり又一箇の白玉匣を取出し是ハ則ち盤芝艸あり
 君よく収めたまへ行者二品の寶貝を受取本相を現し你吾を認得たるや公主行者を見て大
 驚き與へ逃んとする處と八戒釘把を擧て跳り出唯一打討死す行者の與へ駈入て龍婆を生
 捉竟二品の寶貝を捧げ八戒と打連て水面より立返り二郎真君見之水裡の動靜を説り禮を
 のへ拜謝すれバ眞君も別れを告て灤江口へ歸りるふ行者と八戒の寶貝を携へ龍婆と擊立寮
 寮國へ立返り國王の階前より到り此由を奏しければ國王はじり金光寺の僧衆も三藏師徒四箇
 を拜し懽喜事限りあし行者國王より對ひ早く寶貝を塔中へ納め龍婆を塔上へ捉たる水く寶貝

を保守めるへ國王然べしと懽喜るひ文武の官人許多從へ三藏師徒四人を伴ひ金光寺へ急ぎ
 ける此時行者悟淨を呼て你今より大羅天上より到り王母娘娘の寶貝九葉盤芝艸を盤座殿へ納
 め來るべしと命けれバ悟淨心得雲より駕て空中遙去行けり斯て國王と三藏師徒の金光寺よ
 到り行者を命て寶貝を納しむ行者命を受て佛舍利を捧げ塔へ登り第十三層の上より到り瓶
 中より是を納め鉄索を以て龍婆を塔中へ擲め若琵琶骨を穿て送る事を許す眞言を念て國の土
 地神を呼出し亦本寺の伽藍神を呼て你們三日一度づゝ飲食を贈て此龍婆を養ふべし列位
 の神命を領領掌て退さける行者寶貝を安置して塔頂を下りければ忽ち原の如く塔の頂上
 赫然として霞光万道あり瑞氣千條も現る國王塔上を望んで拜し伸眉金光寺を改めて伏龍
 寺と号し駕を還て宮裡へ還行るふ此時悟淨も盤芝草を盤座殿へ納め大羅天上より還ければ
 國王増々懽喜も堪ず大いお庭宴を開て三藏師徒を接待るふ斯て三藏の早く西方へ進ん事を
 願ふへ國王願て關文を倒換若于の黄金を三藏師徒に贈るへせも三藏師徒一毫も受ず國王送
 方あく四個の衣帶鞋襪乾糧のくいを贈るふ三藏師徒厚く拜謝して是を受別れを告て立出
 ければ文武の官人伏龍寺の僧衆遙々と二十里の道を送り行竟り別れて城中より入伏龍寺

の僧達の大恩を感じ別るお忍び又六十里を送り行涙を流して別れけり三藏四個の者とも
祭賽國を跡みさし西方に向ひて急ぎけり

荆棘嶺悟能努力

木仙巷三藏談詩

此時冬尽春も半は推移り三藏師徒道を急ぎ進み成り忽ち長く續きたる嶺あり荆棘嶺と
生茂り薛羅華繞と道廻る其下ふ些少の路の形残りりと雖も左右都て刺針の棘あり一歩
も前じ事能ず行者是を見て老孫此山の光景見て來るべしとて頓て空中に飛昇り四方を伺ひ
少時有て下り來り此山の行程千里計も有べし昔斯の如き荆棘あり三藏大は驚き然れど
て此山を越べきや八戒曰く師父必ず放心しるふも老猪よく道を開べしとて頓て印を結び眞
言を唱れば其丈二十丈計の姿とある亦釘把を取て打振バ三十丈の長とある八戒師父を呼で
曰く吾は續きて前るへと兩手よて釘把を把荆棘を播除れば一釘把も二十間三十間程づと播
除るよぞ三藏大は惟喜跡み着て前るふ悟淨の行囊を荷ひ行者の鉄棒を擧て道を開の助を
す行々百餘里を進む處も既も天晚ふ及んで忽ち一箇の石礫を見る上は荆棘嶺の三字を刻み
其下は二十四字の小字あり荆棘嶺八百里古來有少行人と有ければ八戒打笑ひ吾是

ふ両句を添て後の照驗と做べしとて筆を出して書寫し釘把の刃を以て彫着たり其二句は曰
く自今八戒能開破直透西方一路盡平と三藏欣然として體喜馬より下て八戒を謝
するひ今宵の此處よて夜を明し翌又疾く往べしと云ければ八戒曰く師父斯る深山に住り
るふ事ありれ今宵の月も明のあれば連夜も進るふべしと又釘把を把て棘を拂ひ道を開く三
藏はお抖搜れて又夫より道を走り師徒更も手をも住めず足をも休ず馬の蹄を鳴つゝ竟か一
晝夜を駈るひ亦此日も暮よ及て看々一座の古廟あり乍ち一陣の陰風たり廟の後邊より一箇
の老人青臉紅鬚赤身條牙ある一個の鬼使よ一盤の麴餅を齎せ出來り三藏の前は腹下て
言けると寡人の此荆棘嶺の土地神よて候ふ師徒道を駈て飢るふを悟麴餅を捧げて飢喝を助
け奉らんとす八戒是を聞て喜び既も取んと爲處を行者叱て你漫りよ近く事ありれ此老者會
て好人お非すと又老者よ向ひ言て曰く汝何者おれば我師父を誑成んとするや且我一棒を噴
て見よと鉄棒を把出す彼妖怪行者よ見顯され忽ち一陣の怪風と成て三藏を引擡ひ去方知す
成りけり行者們三個の者俱の慌忙騒げども詮方なく指方も無し尋ね扱す三藏の彼老者よ擡
ひ去れ一箇の石崖の下にお到り三藏を下して老者曰く我を會て人を害する者お非ず此荆棘

歳二年を経て住居する十八公と呼者あり今宵月清して風靜あれば聖僧を迎て友を會し詩を吟じて散悶をせんとな爲のみあり三藏更人ん地も亦く打撃々てを居たりける老人が曰く且吾庵へ入るへとて手を奉て券冊よぞ三藏の恐怖立上り石屋に向ひるへ門の上ふ文字あり木仙庵と寫着たり裡ふ入て座るふ時乍ら外面に聲有て十八公聖僧を請來りしやと云て入來る者あり三藏是を見るへは是三箇の老者よて其容貌尋常ならず一齊ふ入て禮を施す三藏も禮を返して曰く貧道何の徳りあつて仙翁の下愛を蒙るや十八公笑て曰く寡人們聖僧の道ある事を聞及びて爰は待事年久し僂伴よ今日爰は見る事を得たり檀香何ぞ是よ過んや三藏の曰く万望は仙翁の大號を示しるへ十八公が曰く一個の孤直公一個の凌空子一個の拂雲叟と号す寡人が號を勁節と号候ふ三藏聞て又問て曰く列位老壽幾句ぞや此時孤直公が云

我壽今經二千歲古
香枝鬱々龍蛇形
自幼堅剛能堪老
烏棲風宿非凡羣

揮天葉茂四時春
碎影重々霜雪身
從今正直喜三修眞
落々森々遠俗塵

凌空子笑て道

吾年千載傲風霜
夜靜有聲如雨滴
盤根已得長生訣
留鶴化龍非俗輩

高幹靈枝力自剛
秋晴陰影似雲張
受命尤宜不老方
蒼々爽々近仙鄉

拂雲叟笑て道

歲寒虛度有三千秋
不襟三露塵三終冷淡
七賢作伴同談詠
憂玉敲金非瑣々

老景瀟然清更幽
飽徑三霜雪一自風流
六逸爲朋共唱酬
天然情性與仙遊

勁節十八公笑て道

我亦千年約有餘
堪憐雨露生成力

蒼然貞秀自如々
借得乾坤造化機

万壑風烟惟我盛
蓋張翠影留仙客

四時洒落廣香陳
博奕調琴講道書

三藏是を聞て賞讃して曰く列位容形清くして亦奇あり且道を得て高年ふ到る若や商山の四皓より有ざるの四個の老者答て曰く過たる尊言唯疹み入のみあり我門商山の四皓ふあらず深山の四操あり豫て聖僧の詩才神妙あるを承り今宵請來つて吟哦をまし些少心と慰んと思あり此時一箇の赤兎一盤の茯苓膏と五盞の香茶を奉る三藏怖れ疑ひ慢りふ香す四個の老者一齋ふ是を喫して更る餘念あらずと見て三藏漸々ふ落着二箇の茯苓膏と喫し香茶と飲密に座中を見るふ満清麗みして雅致あり些少も塵埃を知らず十八公が曰く善僧原來有道の詩人あり万望の一律を賦るへ三藏今の止事を得す一律と吟じて曰く

杖錫西來拜法王
金芝三秀詩壇瑞
百尺竿頭須進毒
修成玉像莊嚴體

願求妙典遠傳揚
寶樹千花遺蕊香
十方世界立行藏
極樂門前是道場

四老聞畢て大は是を賞讃す十八公が曰く寡人無能ありと雖も大胆も今一首を和せんと

勁節孤高笑木王
山空百丈竜蛇影
解與乾坤生氣概
衰殘自愧無仙骨

靈椿不似我名揚
泉泌千年琥珀香
喜因風雨化行藏
惟有茯苓結壽場

孤直公も又和して曰く

霜姿常喜宿禽王
露重珠纒蒙翠蓋
長廊夜靜吟聲細
元日迎春會獻壽

四絕堂前大器揚
風輕石齒碎寒香
古殿秋陰淡影瀲
老來寄傲在山場

凌空子同く和して曰く

梁棟之才近帝王
晴軒恍花來青氣

大聖宮外有雙揚
曠壁尋常度翠香

壯節凜然千古秀
凌雲世蓋婆娑影

深根結矣九泉藏
不在三群芳地麗塔

拂雲雙並で和して曰

淇澳園中樂聖王

渭川千畝任三分

翠筠不染湘娥淚

斑箨堪傳漢史香

露葉年々顔不改

霜柯代々節難凋

子猷去世知音少

直古留名翰墨場

三藏聞て仙翁の詩個々玉と吐錦を列ぬ吾實は懼む堪たり今夜既お更たけぬ三箇の徒弟們
那里より在て我を待べし万望の仙翁吾も道を教て飯る事を免しるへ四老笑て曰く聖僧心と
勞めるふも夜明あは自ら御弟子輩も逢るふべし三藏向も別を告んとするふ處お怒り外面の
方より入来る者あり三藏是を看るふも絶奇ある衣装を着纏たる一個の仙女兩個の女童も袴
紗の燈籠を捧げさせ濟然として入来る四老出迎て曰く杏仙怎麼して來れるや仙女笑喜を合
で曰く今宵佳客の來臨ありと聞故意々々來りて相見え奉るあり十八公三藏を指て佳客則

ち爰もより三藏身を屈めて仙女は禮ををし敢て言を交るはず仙女十八公も向ひて今宵の盛
會極めて佳吟多あるべし其一二句を示しるへ拂雲雙曰く我門詞理くて又更お赤面す唯聖
僧の妙句實は盛唐の風潮もして是を誦して個々羨むのみ仙女曰く万望の其妙句を教るへ
四老同口も三藏の詩を述て聞せければ仙女滿面お笑を含み三藏も向ひて曰く自ら不才もし
て聖僧の妙句も答へ參せんは怕わりと雖も斯る佳作を聞つるうらま唯お止べきも无禮も似
たれば鄙も一句を述て是を和し奉んと乍ち一律を吟じて曰く

上苑名高衆卉王

酒旗壇坫共稱揚

董仙偏愛春林陰

孫楚曾吟寒食香

雨潤紅姿嬌且態

烟蒸翠色一顧還

自憐過熱微酸意

落繡年々伴三麥場

四老此詩を聞て是清雅もして佳吟あり且句の中も春意を含めり仙女答て恐れ有と云つ
三藏の傍も進倚聲を低して耳語て曰く佳客斯る良夜お到り何を待て響々として居るふぞ人
生の一世の幾句ぞや唯何事も捨るひて吾と快よく樂るへ十八公曰く杏仙今聖僧お就て

仰高の心あり聖僧又俯就の心ありらんや倘是を憐まざるの知趣の人あらず孤直公が曰く聖僧の有道の師あり必ず輕初の事おての此春意協ひがたし我宜く是を計らん拂雲叟と十八公の媒灼とありるへ夜空子と吾との婚姻を司り候はん三藏も敢ず色を發し立揚り你們都て同穴の妖怪怎麼婦人を捜容て我を誑情さんとするや四老三藏の怒を發したるを見て個々目を注め少時黙して居處よ彼亦鬼大に怒り雷の如くは物誇て曰く此和尙何ぞ斯の如く不興あるや我姐々顔色の絶美あるお斯の如き詩才あり你が爲よの相應の佳交あるお那ぞ忌嫌ひて我主を羞ひるや尙此事も隨すんべ我你を掴み行て再度人界よの飯すべのらざと既よ狐み羅んとする三藏の驚き恐れ只管泣叫び涙雨の如くあり仙女の彼鬼を執住り三藏の傍よ居倚万般と透し頭要袖の裡より汗布を把出して三藏の泪を拭拭ひ佳客然様お氣悶るふお我今汝と興お玉よ倚香お依て慰さん遠邊へ來るへとて手を牽て扛立る三藏増々泣喚き駈出さんと爲處を座中の者ども皆立かへり執住りて放トとす三藏の身を遣んと執つ扣れつ争ひけり行者が輩三箇の師父の去方を尋煩て一夜足をも住ずして走りあるさけるが荆棘嶺を打越て天曉近き頃よ到り何處ともかく三藏の叫聲す三箇の者聞若て聲を齊く師父々々

と高聲お呼びけれべ此聲三藏の耳よ入て應と一聲答ると齊く一座お在有妖怪ども怒ら形骸の消失て寂として物もあし三藏の水仙庵を眺りいで僅お走ると思ひしが乍ら三箇は行遇けり四箇一齊お懼事限りおし行者が曰く師父今まで那里お在て奈何ある難爲お遇るひしぞ三藏有し事ども仔細語り彼十八公孤直公拂雲叟夜空子杏仙女童赤鬼等が事まで落もかく談話吾夢の如くよて一向よ土地を辨へすと雖も唯詩を談トたる處を思ふよ此處より遠くらす三箇是を聞て然有べ試に尋見べしとて是彼と探しけるに一邊の石崖に木仙庵の三字あり行者是こそ妖怪の異穴あらめと心を住りて伺ひ見に一株の大檜樹老たる柏古き松あり又一ひらの老き竹一株の丹楓あり岸の上よ古き杏の樹有て臘梅と丹桂と其一邊よ生立山たり行者笑て汝等妖怪を見着たるや八戒悟淨曾て見すと答ふ行者彼老たる樹毎お指て曰く是則ち妖怪あり兩人尙其故を問は行者語て曰く彼十八公の松樹あり孤直公の柏樹あり夜空子の檜樹あり拂雲叟の竹あり又赤鬼の楓樹あり杏仙の杏樹二人の女童の臘梅と丹桂あり八戒聞より釘釘を把て彼木竹を根と俱よ突倒せば果然下際より鮮血淋漓として流れ出たり三藏師徒駭き忙る計りあり斯て三藏の恙なく又馬お乗て三箇の徒弟と從へ西方お進みるふ

妖邪仮設三小雷音寺

四衆皆遣三厄難

去程三藏の若干の日敷を徑て一座の高山を越て平地の處よいで遙か向ひを眺れば祥雲彩霧縹々として殿閣高樓あり三藏行者も向ひ彼處の是何もの有ん行者頭を擧て遙か眺り答て曰は一掃の寺院あり彩雲祥霧縹々たりと雖も然ども亦凶氣あり彼處に到るふとも慢り門裡へ入るふべからず三藏馬を鞭を加へて山門の前へ到り見れば雷音寺の三字有三藏馬より飛で下悟空を叱て曰く激猴今日既雷音寺へ行着たるも那ぞ凶氣有と云て我を欺きたるや行者笑て曰く師父過て我を恨るふも山門の上の四箇の文字あり師父其三字と讀て一字を渡るふの何事ぞや三藏是を聞て再度能々打見れば是小雷音寺と寫着たり三藏點頭て此處小雷音寺と云あらば必定一個の佛祖あらん我門入て拜すべし行者曰く此寺へ入るふの極めて凶多くして吉少し怎生災も遣るふとも返すくも老孫を恨るふも三藏の曰く吾東土を出る時一箇の誓を立たり寺へ遇へば佛を拜し塔へ遇へば是を繞ると云り當今此寺へ遇て佛を拜す那ぞ你を恨んやと昆羅帽子を冠り金襴の袈裟をかけ山門の裡へ入るふ門の一邊へ人在于て大に呼つて曰く唐僧東土より來て如來を拜せんとしるがら那ぞ箇様も無禮あるや三藏是を聞て急



驅を屈て拜を傲前るへば八戒悟淨も同く拜し通る第二の門に到れば則ち如來の大殿に到る殿門の邊の五百羅漢三千揭諦四大金剛八大菩薩比丘尼優婆塞等並居たり三藏八戒悟淨等一步々々拜をせし如來の座前へ到りける行者の更ふ拜をも傲す立跨つて居たりしが亦人在于て呼つて曰く孫悟空你如來の尊前へ立て那ぞ拜を爲さるや行者大いに叱て曰く你們胆太き孽畜生怎生佛の尊名を罵り如來の尊体へ化て佛の清徳を破りぬるや你等目よもの見べきありと鉄棒を以て打んとする時忽ら檉と物音響て空中より一箇の金鉢台下

りて行者が上へ置ひ冠着行者を此裡に閉籠て一寸も動せず八戒悟淨是を見て慌忙動うんとする處を彼五百羅漢三千揭諦們的妖怪ども拿圍み搦めせす三藏をも捕扱て竟に三個俱に縛細たり彼如來も紐たるの妖怪の大將ふて羅漢揭諦等の皆小的の妖怪あり三藏と捕扱て個々本相を顯し妖王小的は謂て曰く這三個を嚴く推籠おけよ彼行者の神通廣大の所あれば彼斯が亡びざる間、慢りお唐僧を喰ひがたし此故よ我今行者を金鏡の裡に封じ籠置たり三日三夜過さば必ず化尽て水と成べし而後彼三藏を請用せんと云ければ小妖的ども懼奪勇み白馬の腹の後お繋ぎ彼昆羅帽子と金襴の袈裟の行囊の中へ疊入奥深く藏し置個々裡へ入て臥みけり行者の彼金鏡の中へ在て右に推左お押ども些少も揺かす事能ず身を如何も長大あしつて突破んとすれば借も此金鏡妙不思議の寶貝よて行者が身長大ある時は金鏡も又長大あり行者身を些小する時の金鏡もまた縮みければ行者五六根の毛を抜扱變じて鉄鍊と做て是彼二三百度突ければ些し透間も見ざりけり行者大よ心を焦ら印を結び眞言を唱へ護法揭諦六丁六甲の諸神を呼ければ列位の諸神降り來り金鏡の外お繞り居て大聖今何の幹有て我門を呼るよや行者曰く我今妖怪の爲に此金鏡の裡に裝入られ種々法を尽せとも出る事協ら

す你們力を尽て我を救ひ出すべし諸神是を聞て力と合せて金鏡を搦んと爲よ分毫も動す事能ず護法揭諦曰く大聖此金鏡の奈何ある寶貝よや當今上下一箇お合して一塊と成推ども扱ども排きがたく我門が力よ及されば今より玉帝よ奏聞して其上方便を廻すべし大聖少時待るへと六丁の神は唐僧を護しめ六甲の神は金鏡を守しめ祥雲を造して南天門より到り靈霄殿前み登り玉帝よ謁之奏して曰く臣は是唐僧を守る處の護法揭諦あり當今小雷音寺の妖怪唐僧們四個を落し入行者を捉て金鏡の裡に裝込三晝夜にして化尽させ水と爲んとす行者が一命風燈の如し主上宜く聖斷有て渠が大難を救せるへ玉帝聞宜て頓ち二十八宿を宜れ你們揭諦と俱に行て小雷音寺にお到り妖怪を収め唐僧を助よと命とるよ星宿列位勅を受て揭諦と俱に靈霄殿を退き下りて二更の時節小雷音寺にお到る此時衆部の妖怪どもよく熟睡て音もせせ星宿金鏡の廻りにお到り謂て曰く大聖我門は是二十八宿あり玉帝の勅を請て愛よ來て汝を救ふあり行者聞て你等疾く兵器を以て此金鏡を打破れ星宿の曰く是はこれ金よて鑄たるものあり打破らば必ず大いよ響て妖怪ども眼を醒すべし我門密に兵器を以て金鏡を搦扱揚べし些少おても尤き光りを見れば你身を變て潜り出よ行者理ありと懼奪ければ諸位の

星宿兵器を把出して金鏡の縁小さし込是を搦んと欲ども揚る事少時置て兵器を挿べき透間も亦し彼是と立馳ぐうち早三更の頃ふかりぬ行者の金鏡の裡に在て今や光充の見るうと東を臨み西を顧み待けれども些少の透間も見えず星宿の列たる亢金龍が曰く我今角の尖りを以て金鏡を突申べし大聖裡に在て些少も透間あるを見れば疾く身を變じて潜り出よ行者聞て心得たりと相待ところを彼金龍鉄の如き角を以て千斤の力を極め金鏡を突申せば怪しや此金鏡恰も人の肉の如く金龍が角は細ひ些少も透間あらば行者裡に在て金龍が角は透も亦し行者呆果不事濟々々々風の漏べき隙も見ず少時沈吟したりしが風と一箇の手計を思當行者又謂て曰く金龍你些少の透を堪よ我今些少手計ありと耳の裡より金鏡棒を把出し變て一個の鋼鑽と做金龍の角の上は錐様をさし孔を穿身を芥粒ほど變じて錐の穴を潜り入て金龍快く角を抜べしと呼りければ金龍亦許多の力を極めて漸々角を抜抜たり行者角の中より眺り出本相を顯し鉄棒を推把て彼金鏡を打破れば寔は是銅山も崩れ倒る若き音勃然と響き度り微塵も碎けて飛散たり此物音も驚きて妖怪ども隠を隠し驚波異ことを致した

れとて忽ち鎧を取て投着太鼓を鳴し妖兵を集め個々利鋒を掲提て大殿の前は跑集る妖怪の大將の彼金鏡微塵も碎推散行者と二十八宿の空中に立居たるを見て大に怒り小妖の命じて金鏡を取集させ一機の狼牙棒を打振て空宙を跳り升り行者們は向ひ汝等逃るとて還さんや且吾と唯三合を戦ひ得ば大丈夫と稱すべし星宿大に叱て曰く汝は何の妖怪か今佛祖は變化し唐僧を誑惑すや妖怪笑て曰く我の便ち黃眉老佛あり人我を尊敬て黃眉大王と崇む汝們孫行者些少計りの法術あるは詩て西方の道手は障る者あしと恣は振廻よし豫て聞ぬ今且我と戦ひて怎的勝事を得ば唐僧を返し汝をも助くべし方知勝事能はざる將僧と俱に打殺し飯の菜は爲べきあり行者吃々と噴出し汝且分は過たる海口を吐て後悔させど快く來て我棒を喫ふべし妖怪狼牙棒を打振て打て罷れば行者も鉄棒を指圖て五六合戦ひける諸位の星宿是を助んと一齊に進みければ妖怪一隻手小棒を使ひ腰より白布塔包兒を拿出し空に向ひて投ると見しが怪しや乍ち悟空をこじり二十八宿護法揭諦等皆一同に彼囊を包ませれけり妖怪の懼喜つゝ肩小擔さて寺内へ歸り小妖的們を呼出し四五十筋の麻繩を把來らせ囊の裡より一個一個を提出し盡般細きさせ一邊は推籠かき繩を設けて懸を倣裡に入て

歌みけり天曉刻も到て行者身を變じて豆粒ほどもあり竟も縛索を抜出三藏を首め八戒悟淨二十八宿護法揭諦等残りなく縛縛を脱解さす等師父を伴ひて快く逃し我の指の指を奪て述より行ん個個權喜願て白馬を尋いだし三藏を打乗せ門を出し列位の星神一陣の狂風を發し大路と指て駈行けり行者の行囊を把返さんと裡へ入んとしたりけれども門々嚴く閉て敢て進み入事能ず行者一隻の蝙蝠と變つて薨の透間より飛入門を越る事三層にして忽ち二階の窓より光明輝き出たる處あり怪しく思ひて指覗き見れば是三藏の行囊ふて金蘭の袈裟光りそ放ふぞ有ける行者心中大い懼び悉く奪ひ奪肩を掛て出んとする時不期も品の指兒と把落し板疊に當て響ければ妖怪驚き起出來り燈光を凝し伺ひ見よ此時行者の行囊を擲ひ窓下の透間より飛出ける妖怪是ふ心着て縛縛置たる者ともを見よ一個も在さりけるふぞ妖怪大い怒を發し那里までも遁すべきりと狼牙棒を推取て个个來れと云捨て宙を飛でぞ追跑たる衆部の小妖的個々利鋒を撰提て我後じと續きけり妖怪漸々三藏を追及大音に呼つて曰く禿子俱你們那里まで逃行ぞ遂にお縛を請よと言りければ星宿天將眾是を見て皆一齊に轉回し八戒悟淨も取て飯し入亂れて責取入行者も不多時駈着來り鉄棒を閃して妖怪ともを打散す此時一場の大戦もて寔は是天も昏み地も動き神哭して鬼叫々巨より夕も到るまで息をも繼ず戦ひしが既お其日も西山も傾き月亦東海も浮み出る此時妖怪願より彼塔包兒を把出す行者快くも是を見着個々心を着よと呼りければ八戒悟淨を首として衆位

の天將輩も其故を分曉得ず只管又戦ひける時妖怪忽ち彼塔包兒を投擲ける行者の急も助斗雲又打乗空中遙々飛去たり其外の天將輩三藏八戒悟淨も俱々盡般彼塔包の中へ裝入らる妖怪の勝凱を競て寺中お飯り小妖的も命じて一個一個は縛縛させ原の如くお押籠おさけり行者の漸々塔包兒を通れ雲を下りて山の上へ停立今も思惟も尽果て涙を流して獨言ける彼妖怪は塔包兒の抑何等の寶貝おれば斯大勢の人を裝入るや我今那里も行て救ひを需んと少時沈吟したりけるが忽然思ひ着たる事あり這般は北方の真武君靈魔天尊を央て此妖怪を退治めし人々と救べしと頓て助斗雲又打乗て南瞻部州武當山を指て飛が如く駈去けり

諸神送毒手
彌勒縛三妖魔

斯て行者の助斗雲お打乗て南瞻部州といたり武當山お駈着雲を下りて三大門を過て大和宮へ向ふ處も一人の靈官立出て何者ぞと問行者答て老孫の孫悟空といへる者あり天尊も見え

奉り度事ありて萬千の道を厭ず故意々々此處に参りたりと稟ければ彼靈官裡に入て天尊
 又斯と奏しければ湯魔天尊是を聞るひ宮を出て行者を迎て殿中お伴ひるひ互に禮終りて後
 行者小雷音寺の妖怪が動靜と説と一編し彼妖怪奇術ありて退治しがたし願くの天降力を助
 けるひて彼妖怪を亡しるひと深く是を感謝し奉ん天尊聞るひて大聖の願われ那ど是を救
 ひざらんや然りといへども帝王の位處を伺ひざる間我恣に干戈の動しがたし思ふ西
 方の小妖的奈何程の事の有ん我自ら向ふも及ぶべうらま某少座下ふ龜蛇二將軍五大龍神
 といふ有是る數千の精兵を添て大聖を助しめん行者懽喜で拜謝すれば天尊則ち龜蛇龍神等
 の精兵を呼で你們是より大聖を隨ひて小雷音寺に向ひ彼妖怪を治ひべしと命するへば衆は
 の神たち命と受て行者と俱に打連て雲に打乘急ぎ小雷音寺にいたり関の聲を揚たりしうに
 彼妖怪門外は跳り出て衆位の神兵を見て喝々と打笑ひ你等那里の毛神をもめて殺候が助太
 刀をさすや多くの神達皆一同に叱て曰く我は是南離州武當山の混元教主湯魔天尊駕前の
 大將五位龍神龜蛇二將軍あり唯今大聖の願よりて爰來りて你們を捉んとす疾く唐僧を
 はじめ衆位の星宿天將們を助け出せ然らば你が一命を助ん倘然らずんば乍ち徹底に切碎さ其

途の妖怪とさすべきありと叫はりければ妖怪大い憤怒狼牙棒を閃して打てくりれば衆師
 の小妖的皆一同に切てかゝる神將等も利鋒々々を差りさして行者と俱に入乱れて半時バウ
 り戦ひし小彼妖怪また腰より塔包兒を把出すを見て行者の急を發て衆位心を付られよ
 と未言も果らざるは妖怪彼塔包兒を投かけり神將等の戦ひも心をとられ何の意構もせざ
 りし故又悉く塔包の中お裝將らる行者の雲に打乘空中に逃去たり妖怪の勝を得て塔包を
 かたげ寺中へ飯り小妖的の命と麻繩を取來らせ五大竜神龜蛇二將軍をはじめ一人ひとり縛
 縛て又空室の裡に打籠おさけり此時行者の雲を下り山の上お止り今い奈何とも詮方なく只
 管泪を流し惘然として立たりけり斯る處ふ西南の方より祥雲一祥地に降り満山は緞紛と盤
 香薫じ諸々の花を降し光明四方お翹さわたる行者驚き奈何と遙か是を見ておれば是川ち
 彌勒菩薩あり行者闊ひしく跪下き拜をさし菩薩當今那里へ去るふや彌勒曰ふや我爰に
 來る事小雷音寺の妖怪を収んが爲あり彼妖怪の實は我身邊に在て聲を司とらしむる處の黃
 眉童子あり我三月三日元始天尊の方へ赴きし時彼童子は空宮を看守置たりしお思ひさや我
 後天袋子を偷とり爰來りて妖怪をさす彼塔包の後天袋子あり凡俗是を換て人種袋と名づく

他が持ところの狼牙棒の柄ち我聲を敲槌あり你等師徒他が爲も惱さる然も衆位の星宿天將諸神等までも捉へられしと聞つる故も我愛ふ來つて退治せんとす行者拜伏して謝て曰く佛祖當今奈何して他を降伏しるふや彌勒笑て曰ひける我今法力を以て此山の麓一箇の草庵を顯し又一箇の瓜畑を構へ許若の瓜を作り置ん你の去て妖怪と戦ひ勝負を求ずして只他を此處まで僞引來れ他口乾き瓜を見て必ず喰んとすべし我都て皆青瓜を見し置ん你早く逃來りて一箇の熟瓜とあり畑の中へ轉び在り妖怪必定是を把て喰ふべし其時你他が腹の中へ飛入て強く苦めあば我先彼寶貝を取返し其後唐僧をはじめ衆來の天將等も都て皆救ひ出さんと曰ひければ行者儘喜此謀計極めて妙あり然れども妖怪もし遠く追來らざる時の怎麼せん彌勒聞るひ苦しからず我一箇の法ありとて行者が左りの手を出させ菩薩右の鎖指も口中の神水をつけて行者が掌裡に一箇の禁の字を書るひ汝よく是を握りて行妖怪と戦ふ時此手を開きて他を見せあば妖怪前後を顧ずして只管追來らん行者儘んで命を受左の手を堅く握り右の手は鎖棒を取て山門へ駈向ひ妖怪早く出て勝負をせよと大音も響りければ彼妖怪くだんの塔包を腰よつけ狼牙棒を打振て走り出汝當今謀計極り力尽て助けを求る處も

獨來りて死を求る木より落たる潑猴かちと大いお嘲り笑ひければ行者怒り心頭も發り返答もあく打てりければ妖怪狼牙棒を廻して十余合戦ふ時行者彼左りの手をひらき妖怪小見せければ抑奈何ある仔細ある在けん妖怪是を見て大い焦燥只管進んで更止らず行者のよき程も戦ひて逃走りけるを妖怪の塔包兒を投べき暇なく只管走つて追來る行者の彼瓜畑の邊りまで逃來り忽ち身を轉じ跡を暗し見すありぬ妖怪行者を見夫ひ爰彼處と尋る間も行者の早く瓜畑へ飛入て一箇の熟しる瓜と變じて轉び居り妖怪の行者を尋れども知ざりければ頼て彼草庵の邊り來り急も呼つて此瓜の誰が作りたるや彌勒一人の老翁と變じ菴の裡より立出るひ此瓜の我作りかきしありと有ければ妖怪曰く殊の外口渴きて堪がし熟したる瓜あらば我と與へて渴をすくひ彌勒則ち行者が變じたる瓜を取て妖怪小與へるふ妖怪此瓜をとりて口を開き喰んとする時行者忽ち身を小さくあして他が喉へ飛入腹の中へ走り下り逆様も立或り蜻蛉返りをあし色々種々も舞跳りければ妖怪疼みを堪へねて地頭も臥轉びて老父々々我を助けよと叫びける時彌勒忽ち本像を現しるひ打笑ひて曰く汝我を認得たるや彼妖怪頭を擧て菩薩を見て大い驚き身を振ひし地も平臥吾去公方望恩みを乘る

ひ我を救ひたびるへと咤悲しむ彌勒立倚りの搭包兒と器を破槌を奪把るひ悟空他が命を助
 けて疾く出よと命ありけれども行者の腹の中は在て猶も恨み晴がたしとて鉄棒を拏て振廻
 て突廻しおしける程は妖怪の總身碎るばかりは疼み堪がたく只管お轉び廻りて手足を掃き
 苦みけるまど彌勒曰く悟空最宜しあるべし我の愛て渠が命を助よと呼りるへは行者聞て
 然る今出べし妖怪口を開けと喚りける妖怪聞より早く口を張開く行者乍ち踊り出て本相を
 現す彌勒妖怪を捕へて彼塔包の内は裝將るひ汝金鏡を怎麼あしつるや妖怪袋の中は在て答
 て曰く金鏡の行者は打碎れ當今取集めて寺中は有彌勒是を聞て塔包を肩に打つけ行者と打
 連て寺内は到せる人衆師の小妖の大王が捉られしを惜り四方は散て逃迷ふを行者走り廻り
 て悉く打殺しぬ斯て彌勒の碎けたる金鏡を一箇は集め眞言を唱へ口より仙氣を噴けける
 へは彼金鏡一箇は堅りて元の如くは形全うす斯て彌勒の行者は別れを告るひ祥雲に乗つて
 歸り去るひければ行者の天に向ひて恩を拜謝し地窖を開いて三藏師徒をはじめ二十八宿五
 法諸神龍蛇二將五大竜神等皆悉く縛縛を解て救ひ出す左右して列位の天將星宿たち別を
 告て皆夫々の本郷へ飯り去りるへ三藏師徒四人は此寺は半日を休息し飯を作りて食し終り

頓て一把の火を放つて伽藍を悉く燒盡し尙西方に向ひて急れけり

極三藏 陀羅一神性穩

脫三離汚穢道心清

三藏師徒の小雷音寺を離れてより一月余りを経て一箇の高山の麓に到り日も西に傾しかば
 三藏馬より下て宿を借んと見渡しるへは一邊は一箇の民家有て柴の屑を晒したり三藏立倚
 て門を敲きさるへは裡より答をあして門を開き一人の老人手お藜の杖を突て出迎ひ何人ある
 どと問三藏合掌して貧道の東土大唐より西天へ赴き佛を拜し經を求るの僧あり今貴地へ到
 り天晚お及ぶ万望の老人慈悲を垂るひて一宿と惠るへ老人聞て恬へ遙々の道を越て能こそ
 來らせるひたれ此地方の小西天の内よして陀羅莊と唱す處あり某今宵の尊宿を勤むべし且
 此方へ入るへとて師徒四人を堂上へ請じ互に禮終りて後老人三藏お向ひ唐長老遠く愛まで
 來るへども此先決して進がたし三藏驚て其仔細を問るへは老人が曰く此地方は一箇の山
 あり号て七絶山といふ山中悉く柿木よして余木一様もなし彼山直は行事八百里よして此
 處より三十里の行程あり柿木七絶あり第一其木壽長し第二は陰多し第三は鳥の果と喰
 事おし第四は虫おし第五霜葉飮ふべし第六は其實を喜じ第七落葉肥大よして字を書へし

彼山余木一根もさく八百里の間皆柿木ばかりなれば七絶山といふなり此山過ぐたしといふの毎年ふ瀟山の柿其實を落す山中積りて又別ふ山をさす雨霖霖と叩れ朽腐れて積りしきものと成り俗唱で柿尿道と云ふた陶東國とも云ふなり時今三月其臭氣悪しきよの及ぶべからずと雖も然れども八百里の間都て斯の如くあり其故は往昔より彼山を越たる人あし長老西天を行ふふの外は行べき道あり我是を以て其進み難きを哀るあり愛迄來りるひし辛苦仇事とあるの殘多しと雖も疾く東土へ歸せらるべし是を聞て三藏煩悶として不言只管涙を流しふる忍かねて行者老人は向ひ高叫で曰く汝宿を借ば貸までの事よて止べし那ぞ種々の漫言を吐出して我師父を驚すや老人行者の容の兇惡あるを見て心中頗る驚くと雖も態と胸を居て叱て曰く此癆病鬼怎生老人お對ひて無禮の言を吐出すや行者笑て曰く老人眼有るも殊なく我相貌の醜さを侮りて癆病鬼と嘲る我形の斯の如くありと雖も法力廣大にして常は惡魔を降伏して妖怪を拿ゆる事を得たり老人是を聞て急な怒りを返して懐ひ家賃を呼で茶を捧げ齋を献じ万般と接待行者お向ひ當下長老よく妖怪を捉る事を得たりと曰ふ我此地方ふ一箇の妖精あり若是を退治するの必す重く禮謝すべし行者曰く此地邊清平ふして又

人家も立籠たり那の妖怪有て崇りを爲や老人が曰く此地方久く安穩ありしは三年前六月の初忽然一陣の狂風發れり那時人家甚忙しき時候にて麥を打的の場上に有秧を播的の田裡に在忙さに紛れ心も付す唯天變とのみ思ひし處に豈計んや彼狂風過る處一箇の妖精在て人家お牧ところの牛馬猪羊雞鶩の類を拿喰ひ男女の嫌ひさく活香にする自從後の常に來りて害をさすあり行者聞て此地方の人心意分散にして齊のさると見たり若然すば那ぞ家毎お銀を集めて數百金とさし法力有僧を頼みて銀を謝物として妖怪を捉へざるぞ老人が曰く汝の云る如く我此莊に家數五百家有家毎に三五両づとの銀を集め一年山の南より一個の和尚を請來り銀を與へて妖怪を拿せんとせしに彼和尚些少も法力なく光頭上を妖怪に打れて西瓜の爛れたる如く終に命を失ひたり我れ又虧を吃ひ他が爲に棺を買葬禮を盡み又他が弟子達にも銀を與へたりしに彼弟子ども尙も欲心欺すして又告状及んと於于今乾淨と不濟然るに舊年又一箇の道士を請來り銀子を與へ妖怪を拿んと爲處に彼道士令牌を響して法術を遣ひ妖怪と相特闘しに天明に到り我れども行て見れば計すも彼道士溪水の中に澆し殺れたり你今此妖怪を退治するの我箇莊中の長者を請來り你と我れども交易し

若妖怪を退治せば汝の要るお憑ひ多少の銀子おても贈るべし倘又你妖怪に負て命を失ひたり共外の徒弟等述ふて圖刺事あり互は天命お任すべし行者嘲笑て曰く你無能の人と頼み利へ圖頼のすられ夫は怕氣付て文書と求るや我の那樣の者お非ず早く彼長者どもと呼來れ彼老人大いご懺喜家僕お命じて八九位の長者を請來る固々三藏剛徒お見之妖怪と拿る事を開業老懺喜事限りおし信何れの師徒う妖怪と拿るふぞ行者進み出て老孫おて候といふ衆位の長者是を見て不濟々々彼妖怪神通廣大よして身體狼狽あり汝斯の如く火低く然も瘦たり妖怪が齒の間お挟じよも不足あらん行者曰く我生質瘦て小分といへども秀氣自ら中に有那ぞ妖怪を怕んや長者の曰く然らば你妖怪を退治するお怎麼の誂銀を要るや行者聞て我々の徳を積和尙あり怎生謝銀を要んや唯是一器の茶一鉢の飯則ち禮謝とするよ足り衆位の長者是を聞て俄お拜謝して懺喜とて忽然として一陣の狂風吹來る彼長者們大いに驚き怖の妖怪來れりと戦々兢々天を地へと騒動す主の老人急に腰門を開き家内の男女早く來と二三藏迄呼集め妖怪既に來れりと叫び立る八戒悟淨も懺得驚き逃入んと爲處を行者急ぎ捕住り汝等逃る道理おし我門沙門の身として怎麼内外を分ざる爰に在て俱に奈何様の妖精やらん

伺ふべし八戒悟淨沒奈何怕々住り居たり斯て彼陣風過る處隠々として半空中は兩盞の燈光顯れたり八戒是を見て大に笑て能慰々々此妖怪必ず有行正ものあらん悟淨聞て其故を問ハ八戒が曰く汝聞すや古より云る事あり夜行以燭無燭則止と那看一對の燈籠を以て先達て來る必定惡き者にあらじ悟淨が曰く汝過れり那は是燈籠にハ非ず妖精が兩隻の眼の光あり八戒三寸計り縮み上り怖怖や眼斯の如くから口の大きい計り知べからず行者が曰く能々汝は師父を大節に守護すべし我空中に到り得と見届來らんとて鎖棒を推把て空中に飛升り汝那斯かれ爰に來り人家に災害をあすや其名をあのれと呼りけれども妖怪更に答をささず長き鎗を振廻し行者は向ひて戦んとす行者の兩三度聲をかくれども妖怪さららぬ一言を應ず只管鎗を閃せば行者笑て汝の聲あるり啞あるり好々我鉄棒を吃へとて兩個空中に在て戦ふ事半時ばかり八戒家お在て空中を伺ひ見るよ彼妖怪遮架おある計よて行者を責討とをせす八戒悟淨お向ひ汝の爰お在て師父を守れ我戦ひを助けて妖怪を打殺ん怎麼手を空くして猴めお獨高名させんやと雲を發し飛升り釘鉈を以て突てかゝれば妖怪又一條の鎗をつりお両手お二條の鎗を以て行者と八戒は戦合八戒是を見て此妖怪遠よ鎗の

妙手ありと云へ行者が曰く他更ふ言いはす未だ人道に返らずして陰氣運さものと見たり怕
 くの天明お到り陽氣増る時よ到らば必ず逃走る事あらん其時必ず遁すべからず八戒心得た
 りと云て又多時戦ひけり既ち東方發白の頃よいたり妖怪頭廻て逃出しけるを行者八戒述よ
 續て追行しに忽ち惡臭人を襲ふ是則ち七絶山稀柿道あり八戒の堪のねて是奈何臭き事や是
 の那里の陶毛圃あるや行者聞て汝乱話を云とさうれ鼻を塞ぎ只早く退避よと終ふ山を馳過
 る頃妖怪忽ち本相を現したり行者八戒是を見よ是一條の紅鱗の大蛇あり巨口を開き剛個
 を呑んと劈ひよる行者進んで近くと見しが唯一口よ呑れけり八戒驚き逃走り大いお叫びて
 泣悲ひ行者妖怪が肚の裡に在て大音よ呼て曰く八戒々々必ず盡く事あらぬ我今這所を船に
 して見べしとて肚の裡に在て鉄棒と把出し骨に押當力よ任せて推付れば彼大蛇甚しく
 疼み苦み頭と尾先を空おろし恰も一般の船の形お似たり八戒是と見て大い安堵し大哥々々
 能船お似りと雖も挽逢さくての風を使ふお好しおらず行者是を聞て等々我今帆柱を造り風
 を使んとて鉄棒を推取のべ背骨よ押當突上れば皮肉の間と差貫き高く登る事五七丈あり寔
 の船の桅杆の如く大蛇疼み苦み又原の道へ變り廻りて下りけるの唯風帆の船を走しひる

が如漸々よ山を下る事廿五里終り嗚呼て死たりける行者鉄棒おて一方と突破り此穴より
 潜り出八戒と兩個よて尾先を取て拽撃飯る却説駝羅莊の長者たちの彼老人が家よ築り此兩
 人の和尚達も又妖怪の爲よ殺されたらんと案じ煩ひ居ところよ次の朝よ到りて行者と八戒
 大いなる大蛇を拽撃て飯り來りければ衆位の老人たちを初として一莊中の男女老少都て皆
 集り來り彼大蛇を見て跪下て行者を拜し當下長老此妖怪と除きて我々が輩生を安んず
 る事を得たり何と以てり此大恩を報んとて夫より只管よ待管つゝ五七日留めけれども三藏
 師徒堅く辭して竟お別れて立出ける衆位の老者たち命銀を贈れども更お受ざれば没奈何只
 乾粮菓品の類を贈て餞別とし迥々遠く送り來る終り七絶山よ近きければ其惡臭鼻を穿て堪
 べからず路徑も皆埋れて通りがたし三藏行者を招き此山怎麼して越べけんや行者鼻を覆ひ
 て曰く許若氣力を費しお通ふ事を得べけれども唯食を營ひべき人あらず衆個の老者是を
 聞我門既ち大恩を蒙る奈何程の日數を問ざりるふとも我門食を辨すべし何ぞ食を營ひ人お
 すと曰ふや行者が曰く然わらば汝等許多の乾飯又は餅饅頭の類ひを備ひ來れ彼背長き和尚
 の足早し彼又與へて大さある猪とさし此道を開しめん八戒笑て我猪となる事容易しと雖も

腹肥大にして食を費さん若ものを喰て飽満なれば必事を齎ん衆國の老人最安き事なりとて
追々人を走らせ個々談合て許若の食を贈り來りければ八戒大い懼せて身を變じて巨大な
る猪となる頭より其尾より到りての長さ事百餘丈路より背より到りての高き事千尺余り一莊
前若の人々食を送り來る事其數を計りたし恰も山の如くに積上げるを八戒足と残りなく
喰ひ尽し上より進んで路を開く一息も五丁八丁ツ、の土を掻のくる許多の人歩の走り駆りて
食を送る事絶間なし八戒強力を盡て終夜道を開く行者の師父を助け沙僧の行囊を携ひ述
お續いて進みゆく終に三晝夜して七絶山を通り越師徒四人老若どもも別を告急いで西方
へ進みあふ

朱紫國唐僧論二前世

孫行者施三折肱

月往日来りて又夏の炎天より到り三藏師徒四人一擗の城下より到る城の上より賣なる嶺を建て朱
紫國と記したり三藏の曰く此處極めて一國の王城あらん城より入て關文を換べしとて城門に
進み街を過て會同館に到る館を預る大使出迎へ仔細を問三藏合掌して貧僧の東土大唐より
西天より赴き佛祖を拜し經を求るの僧あり今大國より來りて關文を換ん事を願ふ大人よりしく

國王は奏するのるべし大使禮を施し且先爰て臥みるへと四人を館中より招入許多の官人
お命と齋を調へて種々と接待其後大使三藏を伴ひ國王の宮中より到り始終を仔細奏しければ
國王懽喜で朕今身お病あり依て久しく刺し臨ざる處當下遠く唐僧の來る事誠に我歡喜あり
と直ふ三藏を殿上より召て座を給ふ三藏國王は禮拜し關文を捧げれば國王是を披き見終りて
曰く汝が大唐の今幾許の世を受君臣正しく明あるや唐王何より死て又蘇生此大願を
起し汝お命ト佛を拜し經を求しむるぞ三藏曰く我本國の往昔三皇世を治むいはゆる大昊炎
帝黃帝是あり又五帝嗣で世を治む少景顛現帝魯堯舜次は三王あり禹湯武此三皇五帝三王
何れも聖明おして天下泰平ありしを終ふ七雄覇を争ふお到り六國秦の爲お并吞せられ久り
らずして天下漢の高祖お歸す其後晋の司馬氏國家を保ち宋齊梁陳隋の五代を経て四海皆我
唐朝より歸伏し万国靜謐四民安樂あり我太宗皇帝大徳寛仁おして堯舜の風あり今貧僧は命
じて佛を拜し經を求しむる謂れは斯様かやらの仔細ありとて竜神雨を過ちて天の罪を安唐
王お救ひを求しを魏徵夢は龍と斬彼竜崇りをあして唐王冥途より赴く處崔珪判官は魏徵書
を贈り再び蘇生て陽門お返りるひ水陸大會をあして幽冥より謝するひし時觀音菩薩出現あり

て大乘の妙經西方有事を示しるふ此故又貧道勅命を蒙りて西方に來れるありと仔細に是を語りたる國王聞て驚歎し寔に天朝大國の風正しく臣賢あり我今久く疾有と雖も是を救ひ助んと思ふ臣下一人も有事あり三藏是を聞て國王の相貌を見奉るふ形容衷心神服たり其病根を尋參せんと思ふ處に光祿寺の官人唐僧を齋を備んと慕しけるふを國王三藏を結託して相伴し山海の珍羞を備へ心を尽して接待けり却説行者が鞆三個の會同館も亦て歇み居けるが悟淨の飯を調へて菜を煮として鹽醬油酢を事をつぐ行者八戒に向ひて你街へ行く買來れと云ども八戒躲懶めて動らざる行者渠を欺んと思ひ謂て曰く彼街の燒餅饅頭羊羹砂糖餅油食蜜食其外旨き物許若ありしを見ざるや然る吾行て是を買ととのへ思ふ儘に賞用すべしと器を取て立上れば八戒口は涎をながし哥々我も你と供ふ行て彼品々を賞用せんと兩個打連立て出行けるが程なく鼓樓の下に致る爰に限りある人群集して押合揉合めめけるふぞ八戒是を見て我門行事能とす彼群集の羣我門が醜しき形を見れば極めて怖れて逃走り或の倒轉び又の踏殺しを爲事有るが却て我門を捉て償命とせんと云べし不可行々々と云て動されば行者笑ひて然あらば汝の爰に止りて待べし我行て物を買來んと云捨て走り

行群集の中は分入何事よと是を見るふ此處に一張の皇捧を張のけて有一邊は十一人の大監校尉札を守りて並居たり行者近侍て是を讀其文は曰

朱紫國王諭自立三朕業一以來四方平服近頃國事不祥沈疴伏枕淹延日久難痊本國太醫院未能調治今此出榜文者招天下賢士若有三精醫者一請登寶殿一療理朕躬稍得三疾痊一願將社稷平分决不虛示爲此出給張掛須至榜者

行者覽畢て滿心歡喜我今醫生とあつて慰べしと思ひ異の方に向ひて一口の氣を噴出しければ乍ら一陣の旋風と起り石を走せ砂を飛ばしける程に群集の人々驚き騒ぎ四方は散乱して逃去けり行者の隱身の法を遣ひ彼榜文を引掲して立歸り八戒が姑し處に到りけるふ只見那童子面を垣根に押當睡り居たり行者密のりの榜文をたのみ八戒が懷裡に押入其儘に捨置て會同館も飯りけり斯て皇榜を守る處の大監校尉少時眼を逐て有けるが風靜りて後頭を擧て見る處に彼皇榜を失ひたり官人ども大驚き倍の當下の旋風が吹去しと覺えたり疾尋ねよと爰彼處捜し求める處に八戒が懷中より彼榜文半出て有けるを見付官人ども立ちより能々

伺ひ看み彼皇榜文は疑ひおし頼て八戒を喚覺し汝皇榜を掲し持からひ定て醫術は秀たる者
 さらん趁早萬歳へ奏聞せん此方へ来るべしと引立る八戒の官人どもを見て大い驚き恐れ
 地上は跪下倒れ我那を醫術を知んや且皇榜を掲したる覺おし官人の曰く汝懐中する處の
 者皇榜おあらざるや八戒頭を低て懐中を見れば紙一枚の紙有押開き足を取下ら牙を咬で
 嘗り借の彼激我を害する事斯の如し我此榜を取て怎麼とすべきやと懐破んと為處を官人
 們架住め是の之當今國王の出しるふ處の皇榜あり誰り懐破る事をあすべきや汝改は是を懐
 中するうらひ必ず能療治するあらん疾く來つて皇帝の病を看よ八戒が曰く是は我獨來る處
 お非ず我師兄孫悟空と云る者取來る處あり官人聞て你乱話事を云ものうも既お皇榜你が
 懷裡に有上の當下皇帝の御前へ連行とも我門が誤りあらす汝速く來るべしと懐立行んと
 すれども八戒大路へ立定つて根の生たる如く更お動かず兼位の官人ども圍繞て只管連行
 んとして争ひ騒動したりけり此時兩個の年老たる太監進み出て八戒お向ひて云やう你が相
 貌此國の人お非ず聲音も又別あり我嚮は東土より來る一個の和尚在て朝門へ入を見たり你
 の彼和尚の徒弟あらすや八戒聞て實は其如し我師父朝へ到りて問文を換んとす我師兄は

會同館お歌み居り彼太監兼位の官人お向ひ你們渠と俱會同館お到るあらは其端的を
 知事あらん争ふとの不要ありとて住めければ尤ありとて官人ども八戒と打連立會同館へ
 を到りける此時行者の嚮は會同館へ歸り悟淨お向ひ皇榜を掲て八戒が懐中へ入置し事を
 語り兩人手を拍て笑ひ居ところへ八戒の兼位の官人どもと打連て入來り行者を見て大お亂
 變て曰く師兄你我を欺き街お連行皇榜を掲し來て我お難為をさせつるの奈何行者笑て取て
 答す兼位の大監搜討行者お見え一同お拜して曰く孫老爺我國王縁有て今日天より長老を降
 するふ極て醫術の手微わらん疾々三折肱を施して我國王の病を愈しるひお天下を分ちて
 徳を與ふべし行者が曰く我醫術の手微有を以て帝王の病を治すべく思ひ皇榜を掲て我師弟
 へ授け置你們を愛まで道引しめたり若帝王親ら愛お來りて我を請待するあらは手の到る處
 必ず病を除ん大監是を聞て搜討等を館中へ殘し置趁早飯つて朝へ入て帝王お見ぬ此事を行
 細お奏聞す國王是を聞て大お歡喜三藏お向ひ聖僧幾位の高徒たりて那れの一住持を尋
 すや三藏の曰く貧僧三人の徒弟有と雖も俱は山野の庸才一個も醫をあす者おし國王聞て
 聖僧必ず太謙するふ事おられと又文武の兼官を召て曰く寡人親ら彼處へ到り唐僧の高弟

を請待せんとし思へども病有よりて筆も乘事能ず你等一個も残す會同館も到り筆長老を請來り朕が病を看すべし你們神僧長老も見へば君臣の禮を以て相見ぬ必ず愚疎ふすべからず衆臣命を受けて大監と俱に打連會同館も到り行者も見ぬ拜をさす行者當中も座を端然として勤りす衆臣謹んで曰く國王病も依て親ら長老を迎る事能はず臣等として神僧を請待せしむ万望の朝も入て主上の病を療治するへ行者聞て既如此列位前行するへ我俱も隨ひ行んと衣を整立出れば百官前行して頃刻朝中も至り國王に奏しければ國王尊嚴を掩せて行者が相貌を見より大に駭き恐れ戦々兢々竜床の上も倒れるふ許多の女官僞得ふため急ぎ後宮も助け入奉る國王近士の人々を召て彼和尚疾く飯しむべし我斯る怖怖者も怎麼近くべけんや近士の人々此故を行者も告る行者曰若我形容を怕れるべし我糸をのけて診脈せん近士の官人又此由を國王も奏す國王是を聞て大に歡喜然らば其如くして疾疾我病を看よ近士の人々行者を宮中も招きければ行者則ち寶殿も登る三藏行者を叱て曰く汝僧我も又難爲をさせんとするや你我も從ひてより以來未だ一度も醫を爲し事を見ず況や診脈も於てとや行者笑て曰師父敢て知るべし我種々の藥法ありて専ら大病を痊すべし亦絲をのけて診脈する病根知すと云事おしと云つゝ手を延して毫毛を拔三條の金線と變せしめ何れも其長二丈四尺二十四氣を象り是を取て三藏も見しめ必ず煩意するふおとて終に後宮も進みける

心主夜間修三藥物

君王筵上論三妖邪

話表行者の近侍も伴れて皇宮内院も入寢宮も到り門外も立て三條の金線を官員も與へ敷て是を聖躬の左の手の寸脈關脈尺脈三部の上も着させ線の頭を格子より引出させ行者右の手も是を掣左の三指を以て寸關尺の三部の脈を試み又敷て右の手三部も是を着させ行者左の手を用ひて件一是を試み終に毫毛を以て我身も返し高聲も裏しけるは階下の尊僧左の寸脈強ふして緊かり關脈滿にして後尺脈孔にして沈み右の寸脈浮ふして滑かり關脈遅ふして結尺脈數ふして牢あり此病驚懼と有か亦の愁思も事有て積るが故あり是を名付て雙鳥失群の症といふ國王是を聞て滿心も歡喜思はず聲を發して曰く你が看處誠も明あり早く藥を進め來れ行者徐々として殿を下れば三藏行者を待携て君王の病を問行者曰く老孫國王の病を診脈し病根を悟れり此故も國王我も藥を求めると疾く調て是を獻ん此時一個の醫官來り行者も向ひ長老今何様の藥種を用ひるふや要も隨ひて來らん行者聞て怎生

一方又限ん薬を見れば則ち用ゆ何程よても把來れ醫官が曰く藥の都て八百八味わたり一箇の病
 ぶ那ぞ尽く用ふる理有ん行者聞て古人曾て云る事わり藥不執方合宜く用ゆと此故ふ
 全く藥品を記し然後加減すべし醫官再度問答ふ及ず藥品製煉の品を會同館へ送り遣しけ
 り國王又三藏勅して聖僧の殿中にて我と閑談するへと止めるふ行者師父も別れて會同
 館へ飯り八戒悟淨の事の始終を説談三個晚齋を吃終りて半夜の頃より到り行者先一兩の大黃
 を取て悟淨も命下細末せしめ亦一兩の巴豆を取て般膜を去糞よて油毒を去せ八戒ふ命じて
 細末ささしむ二個製し終ければ行者一箇の花磁蓋を八戒と與へ汝此器も鍋脚灰を半蓋割
 げ入て來るべし八戒頓て鍋脚灰を取來る行者又花磁蓋を八戒と與へ汝是を以て白馬の尿を
 半蓋取來れ八戒呆て馬の尿を怎麼するや行者曰く藥を丸せんと答ければ悟淨笑て師兄病人
 を弄り者よして慰むや 瀟鮮くして脾虛の個一般道を喫時乍ち嘔吐せん矧や巴豆大
 黃鍋脚灰の類ひと交へ用ひば上りの吐し下りの瀉すべし斯の如くして豈病の愈る有んや行
 者曰く我白馬尋常の馬も有す渠は是元東海龍神の化身あり他が便溺を用る時奈何ある病
 りりとも愈ざる事なし八戒是を聞て畢る白馬の傍より至り器を持て待伺ひ平時はより過せど

も馬更ふ尿をせず没奈何て立飯り行者も向ひ大奇々々今帝王の療治する事を止て白馬の療
 治を先へせよ這斯乾結して一滴の尿も下さず行者聞て默于乱喚を止よ然バ我行て取來んと
 器を取て白馬の前より到り少時の間尿を取來り藥種を掻交て三粒の丸藥とちし器を納め其
 夜の個々歌みけり斯て天明るふ及んで國王衆臣を宣るひ你們急ぎ孫長老が方より到り藥を受
 取來るべし衆臣命を請て會同館より到り行者も見ぬ拜して藥を求む行者彼九子を納たる器
 を官員輩も與へて曰く此九子の是烏金丹と号く無根水を以て用ふべし群臣曰く無根水との
 奈何ある物ぞ我門是を知らず行者曰く地有處の水悉く根有天上より降りて未だ地有處
 ざる處の雨水は無根水と名く群臣拜謝して朝に飯り彼九子を献りて行者が教を述べければ國
 王即ち僧駕官を喚て雨を求むべき法を談するふ此事會同館へも告り越するふ行者是を聞て
 急ふ印を結び呪語を唱ければ忽ち東の方より一朶の烏雲一群起り會同館の上より到り雲中
 聲有て東海竜王敖廣大聖の宣るふ因て來れり抑何等の幹事ありや行者曰く今東海國王病
 わり依て藥を與ふるよ些の無根水を求んと欲す汝聊り雨を降して渠と與へて藥を腹めよ竜
 神聞て曰く大聖の呼るふ依て那幹も弁へず參りたれば雨を降すべし器一品も持來らず行

者曰く許多の雨を求るゝ非ず只些しの藥を用る程有ハ幹足りとせん龍神曰く既如斯我些しの唾を吐て渠お藥を用ひしめん行者滿心歡喜最好々々竜神是を聞て又鳥雲起し皇宮の上より到りて一口の唾を吐ければ化して甘露水とありて降下る宮中文武の官員等々の宮女も是を見て手々お器を捧げ庭上より立出て彼雨を受入れる一時計りて都て是を一集りして一箇の器に納るゝ許多の無根水を得たり國王歡喜で彼鳥金丸を三度用ひければ腹中鳴音を瀉下する事夥し病根残らず下し終り些しの米飲を食し氣を養ひ少頃して心胸寬泰して齋調和し脚力強健あり竜床を立て朝服を着し殿上より出三藏を見え身を倒して拜をまじ趁早官員を命じて行者を輩三箇を宣來せ大酒宴を安排て師徒四箇を後待國王と初として文武の百官后宮の官女都鄙の人民より到る迄歡喜の聲止時あし行者重て老孫昨日陛下の脉を診するお深く病の因を疑ふ是を審み請承事を得や國王曰く家の醜の外に露すべからずと云り然とも神僧の我命を救ひし人あり那ぞ獲匿んや家人元來深く愛する處の金聖皇后と云し美人有三年前端陽の節我花園の裡に海榴亭と云ゆり爰に皇后と俱に角黍を噉酒を吞で樂居たりしと忽然として一陣の風吹起り一箇の妖怪現れ出自ら名宣て曰く我の是

麟山の獅子洞に居住する衰太歳大士といふ者あり你が金聖皇后美人ある事を聞及び是を得んが爲來りたり早く我お其皇后を興へよ儼與へざる時の先你を喰ん其後一國の人民都て皆噉尽すべしと誓る我其時命惜り有ざれども罪なき一國の人民を渠が爲に亡されん事悲く奈何とも可爲やうなく終に金聖を亭の外へ押出たれば彼妖怪乍ち皇后と獲將たり我此爲に驚怖るゝ事少からず又彼角黍の類に腹中より止滯り且皇后の事を愁ひ思ひて日夜是を忘るゝ事あし此故に深く病を得て三年及びし處に神僧の良藥を服して忽ち病愈當下本身復る事は皆唐僧の賜あり行者聞て今金聖皇后を此國へ返し度と意思のすや國王涙を流して云よや及ぶ我此事を思ふ事切あして夜も無晝となく憶々として戀思と絶向あし然とも一箇として彼妖魔を敵すべき悪家あし行者聞て我陛下の爲に此妖怪を退治し皇后を此國へ飯しりバ奈何國王是を聞て倘然あらば此國を你に譲り帝王と稱し我の臣家と成ん行者又曰妖怪皇后を捉行て後一向お音耗あさや國王曰く他先年五月金聖皇后を捉行て又十月より到り爾の宮女を皇后の宮仕ゝ爲と求し故又兩個の宮女を遣したり去年又三月來て二箇の宮女を要行七月重て二箇を要去今年二月亦來て二箇の宮女を要去たりと詞も未だ終ざる處に南の方

より一陣の風吹發りければ國王初め文武の百官驚き獲得妖怪又來れりと呼り叫び普徳宮へ逃匿るゝ三藏の國王と俱ふ身と匿す八戒悟浄も逃んとするを行者拽住り你等少時爰に在て妖怪を伺ひ見よと制すれば二箇の没奈何行者と俱ふ立定りて虚空を眺んで立たる處もち黒雲の間ふ焦面金剛の妖怪現れたり行者二箇も向ひ汝等爰に在て待べし我先妖怪の對面せんと筋斗雲に飛乗て空中より降りける

妖魔寶放二烟沙火

悟空計盜三紫金鈴

却説行者の鉄棒を持て空中より立て大聲を喝て曰く你何里より來れる妖怪を彼妖怪を罵して曰く我は別人ならず乃ち麒麟山獼猴洞賽大歳大王の部下の先鋒あり今大王の命を受けて爰に來て宮女兩箇を把行て金聖娘を侍御せしめんとす抑又你の何的なれば斯妨逆と做や行者答て曰我の乃齋天大聖孫悟空なり我師兄三藏法師西天に往て佛を拜し經と取るも路上此國を過る處汝等が惡行を聞て片腹疼く此國を荷擔して退治せんと思ふ處も態々其方より來て我の命を送る不敏なりと呼りければ妖怪大いお怒り有無を言す長き鎗を取て突てりるを行者の鉄棒を揚相迎空中に在て戰ふ事二三合彼妖怪行者が棒を架外して長き鎗を

兩截に折れ慌忙風に乗て西方へ逃失たり行者且て是を追て雲頭より下り來り叫て曰爾父請陛下と同く來るへ妖怪の逃去たりと呼りければ唐僧の君王を扶けて同く穴を出來て見ば滿天晴朗として絶て妖邪の氣を國王大いお歡喜また筵宴を設け自ら盃を拿金杯を把て行者お進め神僧の妙力誠は感謝するお堪ず行者杯を接て未だ挨拶も及ざる處も乍ち告來る西の朝門の外も上火起れりと行者聞より持たる金杯を酒有儘も空中に投上ければ當的と音して杯の地も落たり國王慌忙く問て云大聖何ぞ杯を投るふや我處爲も腹立事有てり煩心ありと曰へば行者獨り笑て答す安然として在ける處も又一箇の官員來て報て曰雷下西の朝門の起火俄も一場の大雨降來て盡く消滅候ふ然るも彼大雨街中を流るゝ水都て尽く酒臭く候ふと云此時行者曰く是は彼妖怪西方も逃去たるを我曾て他を趕す依て彼妖怪火を起たるものあり老孝國王の賜りし一杯の酒を投て即ち妖火を滅し救たり西の朝門の市街までも何の別條あらんや國王十分懽喜猶百倍の敬を加へ三藏四箇を寶殿に請上らせ万望唐僧も國を讓りて天子と做んと云行者笑て曰く未だ半々其處も到す那賽大歳大王部下の妖怪とも不多時押寄來べし我今這方より逆寄して空中に於て擒ふし來ん不然ば許多の百姓を

驛せ陛下をも驚し奉ん唯這方より推羅て金聖皇后と取返し來ん但知す那山洞までハ行程
幾計の有やらん國王曰く寡人曾て那里の里數を聽み往來五十餘日多少三千餘里移り行者
聞て八戒沙僧に向ひ汝等師父を護持して爰よめ我の那地も趣んと云ハ國王執住て神僧
且寛々支度するへ些計の安排をも備め乾糧糈糲も進すべし又快馬一疋を進せん是も騎て旅
立るへ行者笑て曰く階下の仰事甚巴山轉嶺歩行三千里計の行程は糈酒を樹で不冷間に往回
すべし國王聞て大に呆れ神僧ハ尊貌猴の如かれども怎生道般の法力あるや行者曰

我身雖是猿猴數
遍訪三明一師一把道傳
倚天爲鼎地爲爐
採取陰陽水火交
全仗三天罡搬運功
退爐進火最依時
撰簇五行造化生
自幼打出生死路
山前修煉無朝暮
兩般藥物團圓兔
時一間頓一把依關悟
也憑斗柄運移步
抽鉛添汞相交圓
合和四象分時度

一氣歸於黃道間
悟通法律歸四岐
往來霄漢沒遮欄
三家會在金丹路
本來勛斗如神助
一打十方八千路

國王此詩を見て且驚且懼び許多うち吟じ一杯の酒を著て行者に與へ神僧遠國へ旅立るふ
骨折を謝せん行者一心唯妖怪を降伏せんと思のみよて速く一杯を吃し空中に向て唵と
一聲寂然として形を見ず一國の君臣上下唯奇異の思を做ぬ斯て行者ハ勛斗雲を打踏て快く
も一座の高山に到り即ち下て巔峯に在て仔細を得と觀ひ正に洞口を尋んと欲る處に只見此
山の凹ある處より熾々と火の光飛出さる雲時に天を撲紅焰わり又紅焰の中に一條の惡烟
を冒ひ出す此火甚毒火と見るなぞ大聖自ら恐懼せり又此山中ハ一道の沙を迷り出し
て眞に天を遮り日を蔽ふ行者見ども一回に其故を解す頓て身を變じて一個の撲火的獅子と
成て烟火の中に飛入騰騰騷騷回り烟火沙灰を吹散し漸々烟火開けて本像を現し下りて見ハ
只叮叮當當と銅鑼の聲を聽此處ハ是妖精の巢穴に非ず銅鑼の聲ハ是兵を布の銅鑼想ふに是
通國大路に兵を出すと有あらんと猶急ぎ行ける處に忽ち一個の小妖兒黃ある旗を立て上

書簡を帯て銅鑼を敲きながら走る事飛ぐ如くあり行者又身を變じて一箇の道童とあり頭ハ双
 狐髯に結身ハ白袴衣を着し手ハ木魚を叩き口に道情詞を唱山坡を轉て彼小妖的に行進稽
 首でいふ長官那里へか行さるふや又持るふの怎麼の公文あるや小妖的銅鑼を打止て笑て
 を返ていふ我背上ハ負しハ朱紫國へ送る戦書あり行者曰く何故に戦書を送りて聞んとし
 るふや小妖的曰く我大王三年前朱紫國に到て金聖皇后を奪ひ來り國の樂に爲んと思
 ひしハ一個の神仙來て一件の五彩の仙衣を皇后ハ與ふ是を着るふハ總身都て針刺を生じ我
 大王取て摸ても見事能ハす但些少も手を着れば手心疼て堪べからず此故ハ三年の今日まで
 未だ身を沾さず大王没奈何又朱紫國より外の宮女二箇を要來り竟ハ弄み殺し其後又二箇の
 宮女を弄み殺し今年又要ハ遣しを今般ハ孫行者が爲ハ打破れて宮女を要來す此故ハ我大王
 大いハ怒て彼國を責亡さん爲ハ我をして戦書を届しめんとあり朱紫國王若戰ハすして美人
 を送りて和睦せば造化あり戦ハハ必ず利非じ我大王烟火飛沙を以て責るハ彼國王臣衆を
 首め百姓等ハ到るまで一個も活る者有べからず其時ハ我大王ハ朱紫國の天子と爲我門ハ臣
 下ハ成べし然ハ明日ハ合戦あり快ハ戰勝ハ届くべしと云捨て走て行開て行者法棒と取り

し小妖的ハ後身より唯一打ハ討殺し足を把て洞へ拽下さんとする時只聽當的一聲響て金
 を摺たる牙牌落たり牌上ハ文字あり曰く心腸小校一名有來有去五短身材之體臉無鬚長川懸
 掛無牌即假行者是を見て打笑ハ此小妖の名を有來有去と云然るハ今一棍ハ打殺れて去有
 て來あしと云て牙牌を取て腰ハ付銅鑼と旗との草裡ハ藏し置戦書を取て袖ハ納忽ち又烟火
 の毒を思ハ出し敢て洞門を尋ず有來去ハ駭て鉄棒ハ捨り着其儘空中ハ飛升り徑ハ本國ハ飯
 り且一箇の頭功の手柄を當報べしと吻哨と發聲して朱紫國に歸り金鑾殿に到り彼一封の戦
 書を三藏の袖ハ推入收置て師父且國王ハ見せるふと云終ざるハ國王殿を下りて行者
 を迎とり神僧快ハ歸るひたり俗妖怪の動搖ハ奈何行者地上ハ指て那階下ハ妖精を打殺て置
 たりと云ハ國王是を見て是ハ道賽太歳ハ非ず賽太歳ハ寡人親ク認得たり身尺凡一丈八尺計
 り面金光有て聲霹靂の如く行者曰く是ハ這一箇の報事ハ小妖的あり且血祭ハ打殺し來て手
 始の功を告奉る國王大ハ觀喜で好々神僧一度出て速ハ功を奏し返り來る貨ハ神通力ハ
 り先々酒を爛めて其功を賀喜ん行者曰く酒宴もどハ且置て我第一ハ階下ハ問奉ん金聖皇后
 と別るハ時生麼ある表記をか取交るハしど國王表記の貳字を聞よりも心割るハ思わて堪兼

て涙下り只管泣て謂て曰く

當年住節慶三朱明

太歲凶妖忽震

強奪御妻殊倉卒

誰留表記難離情

是を聞て行者曰く娘々既よ表記をし然に彼君宮中よ在し時甚摩身よ換て愛しるひし物有べし國王曰く是を問て怎麼か爲や行者曰く彼妖王實よ神通有て當難し假令能是を爲果ありとも娘々我面を認得されば朱紫國の使と云とも敢て信し給ふべからず是よ依て彼娘々平日お心よ愛し給ひし物一個を見れば是ありとして信し給ふべし其爲よ齋行ふし國王の曰く昭陽宮の裡梳粧閣上よ一雙の黄金寶串あり是金聖常お帯る處の物あり彼奪れたる日は端午の節會ちれば續命五色の絲を臂お懸るよ依て脱て有るあり是のみ他夕常お愛せし物あり行者曰く然に其金串を老孫に給り候へ國王遂ち玉聖宮よ人を遣して是を取出させ見より國王忽ち涙下り最愛や娘々と幾聲泣て遂ち行者よ避與るん行者是を臂お懸て功賞の酒も吞す舐斗雲お打跨て吻咭と一聲又去て麒麟山へを去り到る願て洞府を尋るよ只人語の喧喚を聞け立て眼を疑し觀看に原來緬多洞門の口よて大小の頭目あり紛擾五百名餘り爰よ座て保守居り

行者是を見て頭回し舊路お到り嚮ち小妖的を打殺する處よ到り流るる旗と銅鑼を投し出し即ち身を變じて有來有去の像と倣徑よ前み行緬多洞よ到れば狸々出ていふ有來有去你回り來らば快く行大王の剝皮亭上お在て你を等るふ行者又銅鑼を鳴して二の門を入忽ち頭を擡て一座を見れば八の窓明りおして亭子の中間に一張の劍金の交椅あり倚干の上お端座する魔王わり生得惡像あり行者見ながら傲慢よして些の禮とも做す外看して只管銅鑼を敲き居る妖王問て曰く你來れと云ども行者答す又問て有來有去你來れと云ども尙答す妖王堪兼て上前出拽住めて曰く你怎磨答ざるや行者曰く元來我不去と思しを大王却て那里に我を遣しより行て見よ限ある人馬陳勢を張て我を見より推つ拽つ遂ち捉て城の内お摺込れ彼國王我を見て則ち斬んと云しを幸よ兩班の謀士ありて曰兩家相爭時來使を斬すと遣ふ我を疑し取書を取て城門の外お押出し三十枚鞭打れ今放れて還り候ふ斯動靜よてい遠らす那里より逆寄お來り戦ふべし妖王曰く然に彼國多少の人馬ありや行者曰く我甚た驚き昏て多少の人馬有しる深く憂す唯彼國の兵器森々と羅列する事厭の生るが如し妖王笑て曰く假令那羅の兵悉有とも我寶具紫金鈴を打搗て烟沙火を飛し彼國を塵ふ爲べきあり你の今より後宮お往て金

聖娘々々報んよ言へき事あり他既我彼國を責んと云を聞て泣き悲みて在あり你往て今見て
 來し通り彼國人馬驍勇ふして必ず此國を勝んとい一日々一時地心を直むべし行者聞て爲
 濟よりと思ひ此事十分中意とて則ち脚門を過廳堂と越見此邊總て大夏高堂此前邊の橋
 とい大又替れり直ち後邊の宮裡に到れ宮門の壯麗なる是則ち金聖皇后の住處あり裡に入
 て見ば兩班の妖狐妖鹿個々都て美女の形を變じ粧ひて左右に侍立せり中間に金聖娘々手
 づから香腮を托げ双眸滴涙果然より玉容寂寞胭脂冷雲鬢蓬鬆空自自古紅顏
 多薄命慙々無語對三東風行者上前て言葉んと云は金聖娘々の曰く道波性的十分無禮あり
 思ふよ我今まで這樣なる怪物を見ず是怎麼ある野獸あるや衆婢上前出ていふ娘々怒りを止
 るへ他は是大王爺々腹心の部下名の有來去と喚的あり今般朱紫國へ戰書を送りるふ使は行
 しあり金聖些し怒りを忍び問ていふ你戰書を下て曾て朱紫國へ到りしや行者曰く老孫戰書
 を持て徑に金鑾殿に到り面頭國君を見候ふ金聖曰く你國君を見候て君王何と曰ひしぞ行
 者曰く彼戰國の事既大王は報上より婦人お聞え上るふ及ぞ唯那君王娘々の事の思
 想言傳の一言稟上し然し右左の人の聞を奈何金聖是を聞て兩班の妖狐妖鹿を遣け行者と

近着るへは行者前倚て木像を現し金聖は向て曰く娘々我を怕れるふを我は是東土大唐より
 西天に往て佛を見え經を求め和尙にて孫悟空と呼候り我師父你れ國中を通るふ依て關文を
 換んとせし處は你的妖王は攝來れるひし事を聞國君の央は依て一般尊身を救ひて國を
 遣せんす依て彼使者有來去と變じて爰お至り候といふ金聖尙沈吟して疑しき面色を
 行者那寶串を取出し進せければ金聖見より涙と發々と流し座を下りて拜し長老果して我を
 救ひ國を救しめぬらば大恩死とも忘べからず行者曰く些しも放心有べからず但し此國は有
 處の火を放ち烟を出し沙を降す是怎麼の寶貝ぞ金聖曰く那は是三箇の金鈴あり彼一箇と
 持打搗は三百丈の火光發て人を燒第二を搗は三百丈の烟光發て人を慮らす第三を搗は三
 百丈の黃沙人を迷す烟と火の還て不打緊と雖も唯彼黃沙最人は毒あり倘鼻の孔に入れば
 乍ち命を失ふあり行者曰く利害利害我曾て斯る鈴なる事と知す其金鈴今何處に有や金聖
 曰く如然寶貝されば大王常は腰に帶して行住座臥身を放ず行者曰く你倘故郷へ還くと思ふら
 ば恐て大王の心は從ひ欺して彼金鈴を預りるへ我是を取匿して後你を國に返すべし金聖聞
 て是理あり我能他を欺て預るべしと懼喜て這詞は從ひるふ行者の原の有來去と變て左右

の侍婢を呼出せば命聖態と有來去早く大王を請じ來れ發と應て行者則ち剝皮亭に到り妖王
 お向ひて曰く大王今日の娘々万望會臨を願ひるふあり妖王大いお懼昏で曰く娘々常お我を
 嘗り喚く怎麼されば今日斯熟戀を我を招くや行者曰く彼朱紫國の事を問るふ故我態と備つ
 て彼國王最早別お皇后を冊けて寵愛盛んありと説話候へば娘々今の憂ふ心も没果て直お我
 お命て大王を請じ奉るあり妖王是を聞て懼昏你の實は大功的あり我彼國を得ば你を以て
 太宰と爲べし行者此言お從ひて恩を訓し夫より妖王と俱は後宮に到れば金聖有歡顔色よて
 出迎へ手を把て相攪るへば妖王曰く亦娘々の身は障ば我身の疼ん事を怕るふありと云ふ金
 聖曰く怎麼這樣の事の日ふや且座を請るへ我君は説話あり大王我を愛するふ事久と雖も未
 だ枕を俱おせざる其仔細の我朱紫國お在し時は外國よりの貢物其外何は依ず大王先君終て
 我もも看せ我預りて收め置事あり此國も三箇の紫金鈴とか云る寶貝ありと聞ぬ大王我も
 の爲覺もし給ひねば看もし給ひす況や尙預りしるのト僧老の契を假我も匿るふの然とてハ
 薄情し此故は我意お從せ男といふ者の疑ひ深き者ありと恨置て曰ひければ妖王怒り
 軟痿と成態と大いお笑て曰く娘娘必ず怨る事あかれ我寶貝の腰に替て則ち遣は有今日當る

你も收預べしと則ち衣を掲て鈴を把出すと行者の後邊に在て眼も瞞ず看居り妖王兩三層
 の衣服を掲起て三箇の金鈴を取て些の木綿を以て口を塞ぎ一箇の豹の皮の包袱見お包み金
 聖も遮與て曰く能々心を用て藏め置るへ必ず是を搦しるふも金聖是を受取て我良納處あり
 とて化粧殿の上は藏し置小的を呼で酒肴を安排し來しめ金聖の増や妖嬈ある態をかし妖王
 又着精靈行者其間には粧盛お近き彼三箇の金鈴を奪て輕々と持出し宮門を出て剝皮亭の前
 へ人無處お到り豹の皮の袱包を開き見れば茶籠の大さある金鈴三箇あり木綿の織布を以て其
 口を塞ぎたり行者利害も知ず彼木綿の塞を三箇一齊お扱了ければ乍ち一聲の響有て烟抄火
 の三箇の的一齋は進る悟空急は是を收る事を知す身中烘々として火起り紅光天地は耀り小
 妖的周章大王は告來る妖王驚き飛で來り能々見れば有來去金鈴を盜來て爰は在妖王大いお怒
 り已賤奴大膽我寶貝を盜たり小的ども快く拿よと呼りければ小妖的の者ども是を聞一齊は
 打てかゝる行者の金鈴を投捨て本像を現し金箍如意棒を擧て打て廻る妖王の寶貝を取收て
 門々を嚴しく關固通トと取巻ければ行者の遁れ出るお道おし鉄棒を收り身と變トて蒼蠅
 兒となり火の無慮の壁上は住り其動靜を伺ひけり小妖的行者を見失ひ隈々を尋ね搜せども

不知妖王是を聞て斯門々を緊く鎖たるよ那處より逃失けるや抑渠の那的かれバ大胆も有
來去と變トて我ハ朱紫國の返答を告機に乗じて寶貝を奪たるや既ハ道山の上ニ在て烟火を
放ち風ニ吹るゝ事あらバ我迎も當べからず先鋒白文豹グ曰く必定是ハ孫悟空あるべし想
必ず路上よて有來去ニ遇着彼を殺し銅鑼と旗とを奪ひ取然して有來去ハ變ト來り大王ヲ欺
しものあらん妖王是を聞て點頭正是正是你ダ云處有理ありと小妖們ハ分付て仔細と尋搜
せ門々緊く保守せけり

行者假名降三怪

觀音現像伏妖王

斯て行者ハ壁の上ニ住り居て是等の事を聞濟し又輕々と飛で後宮ハ到り金聖皇后の髪の上
ニ止り動靜を伺ひ居りける此時金聖の行者グ仕損トて生死も知す成し事を聞て大ニ驚き家
の上ニ打伏て朱紫國の方を拜し涙を流し君王自妾を救ん爲神僧ハ命ト遣しるふ然とも神僧
事を誤ちて死生も知す更ハ又妖怪ニ悟れあハ此事を恨として此上の難難計リダたし念生本
國ニ歸りて鸞鳳煮鷄の喫を全ふる事と得やと聲を發ちて難さるふ行者是を聞て皇后難さ
るふ事あかれ我未だ死す唯我性急ある生れぬて寶貝を奪てより心の裡ニ忍びガたく是を聞

見しハ計すも烟沙火起り終ハ事を仕損じたり皇后今一度渠を欺き連來り酒を備りて睡しめ
よ我又別ハ謀計を廻し寶貝を奪ひ取ん金聖驚き怖れ神僧你那處ニ在て斯の如く説話するや
行者笑て我你的髪の上ハ蒼蠅兒とありて住りたり皇后早く身近き了聲を一人呼出するハ其
姿ハ變じて妖怪を欺くべし皇后ハやしみ疑ふと雖も渠グ言ハ任せ一人の侍婢を呼出す其名
を春嬌といふ是玉面狐の妖精あり召し應トて皇后の前ハ出で跪下娘々今何幹有て召るふ
や金聖グ曰く我今大王を請トて安寝進せんと思ふあり春嬌心得七八人の小妖的を呼出す
那も兎鹿の妖精あり手手ニ打光を秉て出來る行者皇后ニ教て立上らせ一根の毫毛を抜て睡
虫と變じさせ春嬌ハ面ハ放ちければ此妖怪忽ち睡くなり一邊ハ倒れて臥けるよど行者ハ其
散を物陰ニ押込め自己春嬌グ姿ハ變ト許多の小妖的を引列大王の前ハ至り金聖娘々大
王を迎奉らんとして爰まで來りるへりといふ妖王聞て出向ひければ皇后の曰く當今の烟火
も消て偷人も逃しと聞ゆる大王を迎て安寝進せんと御迎お参しあり妖王滿心懼善て皇后珍
重かり彼盜人の孫悟空あり我部下有來去を殺し夫ハ變化し來りて寶貝を奪取んと爲て我幸
ひハ早く見答め寶貝ハ取返したり然れとも道所いか尋れども跡方も見ず此故ハ未だ安心

する事能ず皇后聞て悟空の神通ありとか聞バ待逃失しものあらん大王放心思入事を止て後宮入て安寐るへ妖王皇后の懇み迎るを見て固く許るよ及す小妖的よ分付て你等堅く要心せよと終る皇后と打連て後宮よ來けれバ皇后慈愛を設て大王お進る行者の假よ春嬌と成て酔を把て大王よ酒を強て酔しむ皇后また専ら説的是夫妻話をあし只管酒を勸れバ妖王骨軟筋麻て只管皇后の身を任せざる事のみ悔恨いふ皇后大王お向ひ御程の寶具の會て損じ失ざるや今の那處お置るひしぞ大王聞て彼寶具の天地開闢以前より鑄あしたる處の物おれバ奈何ぞ損る事有ん我今腰よ帶あきたり行者一邊よ在て聞も敢ず手を延て一瀬の毫毛をぬき變じて數千の蟲とあし大王の身よ放ちけれバ衣帶の透間より潜り入浪乱れ總身を咬ひけり妖王痒き事堪がたく手を懷よ入て痒き處を探り手よ任せて捨り出し燈光の下ふて足を見バ則ち數十の虱あり皇后笑て大王の襦衣思ふよ久く兼洗するのす此蟲を生せしあらん妖王大いお慙愧て我從來此虫生じたる事あし計すも今宵醜を山ひしたり皇后笑て曰く大王何ぞ是を愧としるふや常言よ曰皇帝身上三個御蟲有と左右且脱るへ自ら是を捉捨べし妖王終る帶を解衣服を脱み悉く虱おれバ覺す親衣も脱捨て赤裡ありける時腰よ帶し金鈴の袂包

よも虱多く着住居たり春嬌一邊よ在て是を見て大王金鈴の上よ虱多きと計りがたし我是を取捨進せんといふ妖王怎生贖春嬌ある事を知ん急ぎ金鈴を解て春嬌お進る行者是を受取て態と靜よ虱と尋ね妖王の皇后と俱よ頭を低て衣帶の虱を捉捨居たり行者よも聞ぞと又三根の毫毛を抜とり變じて三個の金鈴とあし豹の皮の袂包まで些少も違す變じさせ眞の金鈴ハ我袖裡に匿し置虱よ變じし毫毛を取て身よ返せば數千の虱怒ち失て獲す拾ひ捨たる如し大王衣帶を着しけれバ春嬌贖的の金鈴と大王お捧ぐ妖王是を把て又腰よ帶我皇后と俱お寐ん事を思へども那刺針あさるゝ事を怕る我西宮よ歸りて心安く睡るべしと皇后別れて西宮よ趣きけり彼春嬌夕面よ放ちたる睡睡蟲を身よ返し皇后お寶具を奪ひし事を語り頼て本國よ飯し奉んと云置て隱身の法を行ひ解鎖の法を以て門々を開きて走り出門外お立て高聲お呼つて曰く賽太歳早く金聖皇后を返せと叫ぶ小妖的是を聞て驚き看バ門々残す開きたり慌得て門を堅く關し宮中お入て斯と報す宮女是を通すれども妖王酒お酔て目覺す左右する間お天曉よ到る行者門外よ在て只管罵り終る鉄棒を擧て洞門を打破り入んとす妖王此物音よ睡を覺し門外よ跳り出行者を見て大いお怒り汝那所おれバ愛よ來り我門を破り

たるぞ行者罵て曰く你潑妖怪眼大いかりと雖も我を認得ず我の是聖天大聖孫悟空あり金聖皇后を把返ん爲爰よ來つて你を亡滅あり妖王同く罵て曰く你の唐僧よ從ひて西天へ行經を求ると聞つるよ怎生今朱紫國の奴とあり爰よ來りて死を求るや行者大いお怒り説話不知の潑怪的今朱紫國の王家我をして父母神明のとく尊び何ぞ断よあるべきやと鉄棒を把て打て懸る妖王宣花斧を持って度り合五十餘合戦ひし妖王不當とや思ひけん忽ち風頭の方よ飛退呼つて曰く孫悟空少時待て我今你と戦はずして金鈴を搥く見すべし你逃ることを止めて見物せよ行者曰くわれもまた金鈴を搥て見すべし你逃ることをやめて見物せよ妖王曰く你が方おも金鈴ありやそも〜那國より傳へ受しぞ其謂れを聞ん行者曰く且你的金鈴の謂れと聞ん妖王曰く我この金鈴の太清宮八卦爐中よして太上老君の久く煉結就命を以て作りある處の金鈴最無上の至寶あるを故わつて我よ授けるひしかり行者曰く我此金鈴も你的云處と同一然ども你的金鈴の雌あり我金鈴の雄あり妖怪曰く是の仙家金丹の寶貝何ぞ雌雄のあるべきぞ你日搥て見よ行者曰く你且先へ搥べし妖王嘲笑て頭て金鈴を取出し先第一の鈴を打搥けるに更よ火出る事あり妖王驚き又第二の鈴を打搥よ烟り發らす増々恐得て第三

の鈴を振搥せども又見よ黃沙起る事あり妖王驚き怪み惜の我此金鈴盗よ雌よして雄に逢て怕れて烟火を發せざるや怎麼せんぞと獨言けるを行者喝々と打笑ひ然らば我金鈴を搥て見すべしと三箇の金鈴を拿出し三箇一齊に打搥ければ烟沙火一同お進る此時行者呪詛を唱へて巽の方に向ひて一口の氣を吐バ忽然に旋風吹起り火勢盛んふ烟り渦巻黃沙滿天よ飛散て面を向べきやう非ず妖王怕れ咳き逃んとするお道なく狼狽騒いで苦み廻り既お命も危う處お只聽空中に聲有て孫悟空我來れりと呼る者あり行者頭を回して是を見れば是則ち南海普陀峯教主觀世音菩薩あり左りの御手よ淨瓶を托着右の御手に楊柳を拿甘霖お漬て火の上の洒下るへバ烟火跡なく消失て黃沙も乍ら納りぬ行者の金鈴を取藏り空中に飛升り合掌して菩薩を拜し當下那里へ往せるふや菩薩曰く我態々爰よ來て妖怪を降伏す他の是我防的の金毛狐あり他を守る處の牧童睡睡し間に此畜生繩と咬斷朱紫國よ到り國王の災を拂んとす行者曰く彼妖精朱紫國王を惱し皇后を狂惑し害を爲事少からず何を災よ拂ふと曰ふや菩薩又曰ふ汝仔細事を知す朱紫國王當時太子たりし時歳を好よく弓射事をあす西天從來佛母孔雀大明王菩薩あり生る處の雌雄同個の孔雀あり渠等山坡下お遊び居けるを天子一矢放て

雄を射て疵付たり雌の孔雀其矢を取て返り佛母孔雀明王へ訴へたり佛母則ち是を聞て朱紫
 國の太子三年折風の災ひ與へ此罪を報しめよと仰りしを時節我彼狐に乗て一邊に居合
 せ此詞を聞居たり此業畜又是を心に覺居て彼國の災を拂んとして終つ妖怪と成て皇后を
 奪ひとり三年洞の裡に隠れ住今年の當今數滿て汝國王の災を除き我來て妖邪を收り歸る
 あり行者聞終りて這樣の故事あらば世が命を助け候はん菩薩魔王を一喝するひ汝業畜は
 俱へ還す何の時を待んとするや妖怪地の上の倒轉びて本相を現しければ菩薩其脊上より打駭
 るひ畜生三箇の金鈴の奈何せしぞ行者聞て老孫是を奪ひ置候ひぬと菩薩に金鈴を返し奉る
 菩薩取て狐の項より繫ぎ掛南無は回するふ斯て行者の鉄棒を輪して解多洞に打て入小妖的と
 塵にちし宮中へ至て金聖娘々々見ぬ首尾と委く語り今より本國へ歸し進せんと云ける
 よぞ皇后大いに懼喜拜謝する事盡す行者頓て草を束て竜の形を作り是を皇后に騎上しめ娘
 々怖るゝ事あかれ堅く眼を塞ぎて必ず開るふべからず我暫時は本國へ送り進らすべしと神
 通を以て彼草竜空中を走しむる皇后の眼を塞ぎて唯耳の風の音を聞のみよて未だ半時あら
 ざるふ忽ち朱紫國の宮中より立版り行者雲を拂きて殿上より皇后眼を開さるへと呼りける

此聲を聞て金聖兩眼を開き見るへば思ひさや我本國の宮中ありければ懼喜るゝ事限りなし
 國王見より竜床より下り走りより絶て久く逢ざりし思想の情を述んとて皇后の玉玉を奪抱き
 倚んとするひしが猛然として地上より倒れし皇后の身より刺針生たり我手疼みて堪がたし早
 く救へと叫びるゝ行者走り依て助け起し謂て曰く皇后妖怪は捉られるひし上首一人の道士
 來り五色の仙衣を贈り皇后お着しむ然るゝ其仙衣より刺針生て人の近く事能はず此故も三年
 の間終る身を沾するのすといへば國王是を聞て且懼喜且愁ひて此刺針を怎麼せんと思さる
 る此時空中より聲有て大聖有や我來れり刺針の衣愁るとかかれ行者頭を回して是を見るふ是
 真人張紫陽あり雲を下りて宮中より到り行者に向ひ禮を施し小仙三年前佛會お赴き此國と遇
 るゝ國王三年折風の災ある事をさく時ひ妖怪皇后を攝去をみる怖くひ妖怪の爲に沾される
 るん事を傷み想ひて一杆の古き棕衣を將て變じて五色の霞裳とあし皇后より與へて着しめた
 り彼刺針の棕毛よして三年の間皇后の身を守りたる物あり當今大聖功を立て皇后を救ひて
 本國へ版る事を得たり此故も我來りて那棕衣を脱しめんとす皇后真人を見て大恩を謝し禮
 拜す真人立侍て棕衣を脱しめ自ら着し人々も向ひ辭し別れ空中より升て歸りるゝ國王及び皇

后も天に向ひて禮拜し夫より大い酒を設け三藏師徒を接待けり行者三藏告て書預
け置し戦書を出し國王は見しめ其小懈多洞よて有し事ども是是落もあく説話けれ國王は
じめ衆位の官員輩感謝して拜禮する事絶間なし國王の只管は此國を讓ん事を曰ひけれども
三藏行者固く辭して唯西方は趣ん事を急ぐ國王今の没奈何國文ふ印を寫し三藏小遊與け
れ師徒四人國王の辭語を告城門を立出けれ國王を首衆位の官員輩遠く送りて別けり

盤絲洞七情迷本

濯垢泉八戒忘形

斯て師徒四個の衆衆國を離れてより又多少の山水を經歷し幾す秋去冬盡て又春光の明
値或時一座の郵莊を望む三藏馬を下り我今此人家を往て些の齋を要り來ん行者笑て曰師父
齋を要るの我門代りて行べし那ぞ自親師父の行る事あらん三藏曰く平日は汝們那邊の
遠き處よても勞を厭ずして齋を乞來る今日人家既近く又天氣清明あり我自去て乞來ん
と遂に鉢を取て歩み行直ふ莊前に至りるへ前一座の石橋あり寂々々として鐘犬聲も
なく一個の茅屋の奥は四個の美女窓の下に在て鬘を飾り風と結す又庭上は三個の女子
を圍て遊び居たり三藏便ち橋上立て貧僧の東土大唐より西天に至り經を要るの僧あり

今檀府より來りて齋を乞奉る万望の些しの齋を思ふ彼女子等是を聞大いは僞言一齊門
を出來り長老疾此方へ上前るへと三藏の手を挽腰を推て茅屋の一邊ある一個の石洞の裡
押入けるよぞ三藏驚き信の他門我を害せんと爲ちらんと身を轉して逃出んとするは彼女子
們都て武藝巧り三藏を撲倒し繩を以て洞中へ申上個々衣服を脱肚を露しけるが忽ち鼻の孔
中より蛋の粗細ある白き糸を抽出し玉を飛し銀を散すごとく須臾の間は莊門を一逼り
單ひけり三個の徒弟の路の一邊は歇みて在けるが莊門忽ち雪を埋みたる如く一片の白光と
變じたるを見て三個大さきは驚き是必ず師父の妖怪に逢るひしあらん早く行て救ふべしと駭
出んと爲けるを行者兩個を住め汝們緩く事あり我去て見て來んと直ち村莊より走り行彼白
光を見るは白糸を經緯し引はえ千万層の厚さあり手を以て是を押却て和かよして點あり
行者甚だの物あるを知らず頓て呪詛を唱て此地の土地神を呼出し此處は何と号る地方よて此
白糸の怎麼ある物ぞと尋れば土地神答て曰く此前邊ある山を盤絲洞と号け山下は一個の盤
糸洞あり洞中は七個の妖怪居住せり他等俱は蜘蛛の精よて白糸の則ち蜘蛛の糸あり又此南三
里よ一座の濯垢泉あり此泉天生の熱水よて他等毎日三遭づし那里行て洗足するあり今日

も頼て出来ん少時待て見届るへ行者是を聞て先土地神を放ち返し一個の蒼蠅兒と殺じ草頭
よ住りて待ける處よ不多時白糸盡く消失て原の村莊を露し莊門の裡より七個の女子歩み出
たり行者則ち翅を延て前なる女の頭よ住り他等も從ひ行ける處よ果然南三里許り行て一座
の増門あり十分壯麗あり一個の女子扇門を推排け中の一塘の熱泉あり五丈ふ一丈餘りの
廣さよて深さの淺三四尺ふ過す水の珠よりも滑かき池の汀より兩箇の漆塗の衣架を挿へ
たり行者又翅を延て衣架の上よ住りて伺ひけるよ彼女子等皆一齊ふ衣帯を脱我門早く洗足
し家よ飯りて彼和尚を蒸て吃んと個々雪の如き肌を露し浴地よ入て笑ひさわぎ水を濯せ波
を翻して戯れけり行者是を見て思やう今他等を打殺さん何より安し然ども常言ふ男不
與女闘と云は却て我名を失ふべし且一箇の謀計を以て他等を動さるやうふすべしと忽ち
一翅の老鷹と變下衣架の上よ掛たる七個の衣帯を盡く掴み取嶺上に飛去て原の路傍よ立降
り本相を現し八戒沙僧よ此事を説話ければ八戒是を聞て師兄妖怪と知は何ぞ是を打殺さ
る是草を斬て根を除くの謂あり我今行て打殺し來んとて釘釘を取て出行けり沙僧行者よ謂
て曰く今師兄の曰ふ如くあらは師父の極めて彼邸莊の裡よ居るふべし我行て伴ひ飯んとて

頼て彼石橋の邊よ走り行茅屋の裡よ入て見は妖怪一個も在す一邊の石洞の裡を覗き見は愛
み三藏の細縛られて御座たり悟淨走り入て縛めを解下して急ぎ行者が待居る路傍へ飯りけ
れば行者懼喜三藏に向ひ此後齋を求るの我門よ任せ置るへと云は三藏打點頭我假令殺死
するとも此後自ら齋を要べのらぞとて悔けり却説七箇の女子の衣服を裏に取れて出る事能
ず水中に躍り個々鷹を罵り居たり此時八戒門を掛いて入來り是を見て打笑ひ女菩薩我ども
同く洗足させて給るべしと直綴を脱捨て撥的水中よ飛入ければ女妖等の大いよ怒り此和尚
十分無禮あり出家人の身として女人と同く洗足せんとするやと一齊ふ取圍んで打んと爲と
八戒原水煉の達者おれば水中よ在て忽ち變じて一個の鮎魚と倣女子等が肌を探りて狂ひ遇
れば女妖等大いよ困り呆西へ追とも捉當す東へ搜れども手を滑し那方此邊と亂轉し女妖們
都て心倦精勞れて詮方を知ず八戒又水中より跳り出本相を現し直綴を着し釘釘を擲て罵
て曰く你等我を鮎魚と思ふや我は是東土大唐より西天よ至り經を要る長老の徒弟猶八戒と
の我事あり你們我師父を捉へ蒸吃んとす大胆なる女妖怪も性命を免し難し我釘釘を受よと
て走り倚て築んとすれば女妖等大いよ狼狽水中よ跳下八戒を拜し我門眼有て珠るく你的師

父を捉て家お置たり今より師父の性命を助て此の盤費を送りて西天へ去しめ遣せん方留我
 們が命を助るへ八戒曰く糖を嘗らして君子を欺く常言あり我那ぞ其甜口を信すべけんや早
 く頭をのべて我釘釘を吃とて只管上前で築のゝる女怪等倏得て耻を孤ふ暇わらず膝下お
 手を侮着て跳出個々勝より彼糸を探出し四方八面より絲をくけ忽ち八戒を當中お單ひ住め
 たり八戒の浮雲の中お圍れたる如く脚を舉れば眼さ倒れ飛出んとすれば頭支へ右よ脚ひ左
 お倒れ眼昏みて唯地お臥て呻吟居たり女怪們の八戒を單ひ住め個々赤裸よて村莊に飯り糞
 衣を出して身お纏ひ石洞の裡を見れば唐僧在す借の這所逃失たり我們誤て唐僧を捉へ却て此
 耻を蒙りたり先師兄の許お行て商量おさんと七個の女妖一齊よ西を指てぞ出行ける少時
 ありて八戒頭を擡げ見れば纏たる絲些しく破れたり漸々是より這出て三個の侍居し處へ駈歸
 り利害々々我今女妖等が絲よ單ひれて危く命を助りたりとて頓て又村莊よ至り一把の火
 を放て石洞茅屋を燒盡し師徒四個立出て西お向ひて急ぎ行ぬ

情因三箇恨一生三災毒

心主遺魔幸破光

原來正盤絲嶺の西六七里大路の一邊よ一座の黃花觀あり觀中の道士の則ち彼七個の女怪と

同學の兄弟おて常よ往來をあしける故此日女怪等復お觀中お來り道士お見ぬて唐僧を捉て
 耻を蒙りたると語り種々商議して居處お三藏の是を知す西に向ひて路を急ぎ不多時觀門
 の前お至り我們少時此觀中お休足し便宜を見て齋を要べしと徒弟等と俱に門を入り主の道
 士出迎老師父の何處より來りるへると問三藏手を拱て答て曰貧僧の東土大唐より西天よ
 至り佛を拜せんと爲の僧あり當今仙宮を過るに依て少時休足と爲んとす道士是を聞て大い
 お懼ひ諸の聞及びたる東土の聖僧よおのし候や小道大いお失敬をゐしたりとて四衆を正堂
 に請じ裡よ入童子に五鐘の茶をくませ道士手親三藏よ献じ行者の師父の後よ座し形の小さ
 を見て是を三徒弟とや思ひけん先八戒お茶を獻じ次お悟淨次に行者よ進り目親一鐘を取て
 相陪す行者の嚮より道士が唐僧と聞より大い喜び兼て準備したる如く急速よ茶を過り又四
 鐘の茶よい都て赤棗を入道士が茶にの却て黒棗を入たるを見て心中怪み茶鐘と手よ拿少時
 伺ひ居る間お三藏八戒沙僧の何の心もあく都て茶を吃畢りけるが忽ち三個一齊お阿呀と叫
 びて倒れけり行者驚き怒り罵て曰く此畜生我と你と原來何の怨もあし怎麼毒藥を將て我
 父を害したるやと茶鐘を當的と投中たり道士袖を舉て架住め大いに怒て曰く你汝家自ら

禍を招き却て怨むしと云や你們橋を盤糸洞に入て書を乞瀬垢泉にて洗足を為すや行者曰く汝既に盤糸洞濯垢泉の仔細をしる情の彼七個の女怪の都て你が老妻なるべし且我一棒を試看よと耳の中より金箍棒を把出せば道士も急身を回し一口の寶劍を取正堂お在て戦ひけり時に忽ち奥の方より七個の女怪一齋お出来り個々懐裡を引開き胸の孔中より糸を作出し行者を單ひ住んとす行者擣入八戒が説話を聞たれば糸を掛られての不當と身と解して空中お飛升り霎時息を休むる間に忽ち彼觀門嚴闔も棧と穿が如く舖單ひ看看一片の銀世界と變たり行者是を見て心に驚き利害利害我幸も早く脱れ出たり倘一度是も單れおば怎生して身を動すべけんやと霎時沈吟したりけるが頓て又一箇の計策を思ひ着七十枚の毫毛を拔七十個の小行者と變させ金箍棒を變じて七十條の父兒棒とあし一個の小行者毎も父兒一棒づゝ持せ彼舖單ひたる糸の廻りより撻撻させければ遂お裡より七個の蜘蛛を引出しけるも彼蜘蛛個々二尺余の大いさまで俱に手脚を縮めて一團とあり命を助るへくと叫びけり行者悉お小行者を身も返し收め父兒棒を集て鉄棒とあし彼蜘蛛を件一も打殺す彼道士又劍を揚て跳り來り行者も向ひて戦ふ事五六十合道士斷々も力勞れて些し身を退くと見けるが忽

ち衣服を解捨て兩手を上も指擧ければ兩邊も一千隻の眼ありて惡刺と一聲叫ぶと等く眼中より金光迸放出て十分利害行者此金光黃霧の中お單ひ籠れ大も驚き急ぎ脱れ出んとすれども脚を動す地少く上も向ひて飛山んとすれば却て金光も打落され左も廻り右も轉ト汗を流して働けども鉄桶の裡も在が如く脱るべきやうも無りしが又急ち一箇の計策を思ひ着一箇の身と搖し變て穿山甲と做土の中お鑽り入地下お在て二十余里を鑽り漸々もして頭を出し見れば彼金光十余里の裡を單ひ此處の光も無れば遂も地上お立本相お現しければも遂々の地下を潜りて精心を勞かし再度戦ふべき氣力もあく斯ての怎麼して即父兄弟等を救ひ得んやと涙を流して立たる處も向邊の方より一個の婦女身も重孝を穿手も一盞の飯と持涙を流して走り來りければ行者是を見て世間又我と同じ悲ひ人あり彼婦人の誰為と哭やらんと上前倚て問て曰く女菩薩何個を失ひて這様も哭るふやといへば彼婦人涙を押し曰く我夫貴花觀の道士と争ひ毒藥を以て殺さる我此一飯を墓お備へて些少夫婦の情を離さんとす行者是を聞て發々と涙を流し女菩薩の丈夫の爲も一飯を備て祭りるも我剛父も又彼道士が毒も害せられるへとも我是を祭るべきやうなく心の疼み堪がたし婦人曰く長老の那國より來

るへる人ぞと問行者則ち東土より爰より来り觀中にて彼道士と戦ひし事其身金光は果園られ
 んと爲しを纏ふ身一個遁たりとて万般落もあく語ければ婦人聞終りて云やう情の長老彼道
 士を知るのす他が名は百眼魔君とも又の多目怪とも云あり他を降さんと思ふよの那里一
 位の聖賢あり此聖賢必ずよく金光を破り道士を降伏するふべし行者急ぎ再拜して女菩薩万
 望の其聖賢を教るへ婦人曰く此南千餘里は紫雲山といふ山有其山中千花洞は一位の聖賢
 昆監聖菩薩といへるあり是を請来りるひあは那道士を降伏せん事疑ひるしと仔細に説教我
 の爰にて別れ候のんと云うと思へば忽ち空中に飛上り紫雲山と現れ我龍花會上より你が
 師父を救ん爲爰来れり你紫雲山に至るとも我教し事を告る事あかれと西をさして飛去る
 ふ行者則ち空中を禮拜し忽ち筋斗雲を放ちて打跨紫雲山へと飛行けり斯て千花洞に至りけ
 れば更な難犬聲もなく精々情々たり洞中へ一個の老婦榻上座し居り行者是ぞ彼昆監聖菩
 薩あらんと思ひ進み入て拜しければ菩薩榻を下りて曰く汝の孫大聖は在らずや今何幹ありて
 来りるへるぞ行者曰く菩薩怎麼して我を認得るふや菩薩曰く你前年天宮を闕せし時普天普
 地都て皆名を傳へ離る你を知ららん行者曰く老孫今の佛門に皈依し唐僧を守護して西天に

至る路にて今日黃花觀の妖怪は川邊難逢ぬ万望の菩薩彼妖精を降し師父を救ひ給ひるべ
 しと云は菩薩曰く我魚籃會を赴きしより以來已に三百餘年姓を隠し名を隠み未だ會て門を
 出す今日誰り你に我隱室を教つるや行者曰く老孫原一個の地理鬼曾て他の教を受す自ら知
 て参しかり菩薩曰く我本外に出じと思へども你已に經を求るの事事われは是を助でやの有
 べのらず我今你と俱に去べしとて頓て雲を纏て打扮るへば行者後に従ひて不多時黃花觀に
 至り金光艶々たるを臨み行者指差して曰く彼金光の則ち妖精あり菩薩今何の器械を以て他を
 降しるふや菩薩曰く我子昂日星官の煉たる處の绣花針あり是を以て降すべしと衣領の裏に
 り眉毛の粗細ある五六分の長短ある绣花針を取出し空に向ひて投上るへば一聲の響と俱に
 金光忽ち消失て彼道士身と動す事能す直に原身を現しければ七尺計りの大蜈蚣あり行者
 大いに喜び妙あるかあ〜早く針を尋ね候のんと云は菩薩掌を展て針の運びて爰を在と
 て遂に行者と觀中へ進み入唐僧等を見よ三個俱に地へ倒れ早言断たる光景あれは行者聲を
 發ちて哭にける菩薩住めて曰く大聖慈悲事あかれ我懷中へ解毒丹あり你に與へて唐僧を救
 しめんと一個の破紙を包たるを取出し紅き丸藥三粒を行者に與へるへば行者急ぎ三個の口

を推開き個々一丸を吹入けるに須臾の間ふ三個とも嘔吐を志し毒藥を吐出し急ち正氣に後りけり行者則ち師父より向ひ有し勸搖を仔細と語ければ三藏はじり兩徒弟も深く菩薩を拜謝しければ菩薩も夫々答禮し彼蜈蚣を指し掛て千花洞より歸られける八戒星を見て此焼十分利害那様の惡的を斷弄ぬるやと駭けバ行者曰く先に他が小兒の彼昂日星官あるよし語れり星官の一雙の公雞あり思ふに此婦人の極て一個の母雞あらん雞よく蜈蚣を伏すと此故も容易他を捉たるあらんと三個是を語つゝ且行者が辛勞を謝し大路に沿て出行けり

長康傳報魔頭狼

行者施為變化能

一時秋の初節ふ當り一座の大山に至る其高き事天と等く松栢日を覆ひ巖石時立路阻伏し三藏心中の恐れをみし徒弟等能々心を用ひよと曰へバ行者曰く老孫光景を見届来るべしと頼て虚空を飛昇り前面遙に眺る處に忽ち雲端より大白の星現れるん行者急ぎ進み備て李長康何國よ去るふやと問金星答て曰く我今此山より妖魔有事を大聖よ告んと思ひ懸々爰爰來れるなり此山行程八百里驍驍嶺と号く山中の驍驍洞と云る有爰ふ三個の妖魔有他等部て神通廣大にして部下は四万八千の小妖あり大聖十分心を盡て變化の妙を施しるへ若些少も怠慢の

らバ必ず爰を過ぐたのらん行者是を聞再拜し頼て金星小別を告雲を下りて三藏に此由を報三藏泪を流して曰く斯の如く艱難多く怎麼して此地を過何の日や西天に至り佛を拜する事を得や行者いへく金星這樣お告ると雖も必ず五六分の唐音有ん且八戒沙僧の爰爰在て師父と護て待るへ我嶺を登て伺ひ來んと又雲より飛去けり少時有て行者雲より下を臨見し忽ち山の背後より叮當叮當と鈴の音聞ぬて一個の小妖怪一桿の令字を書たる旗を捧げ腰お給と着て出来る行者是を見て思やう他必ず山廻りの小妖あるべし我他を欺きて妖魔が消息を問べしと急ぎ雲より樹陰に下り一個の小妖と變じ他と同行旗を掲げ給と帯出來り彼小妖は行會ければ小妖見答めて曰く你の何里より來るのぞ行者笑て曰く你却て一家内の者を認得ざるや小妖が曰く我城中は汝を見ず怎麼認得んや行者曰く汝認得ざるも理あり我今まで燒火的を勤居し故平日は汝と會事なし小妖頭を打擡て我家の燒火的の原汝を見ず且我大王家法嚴く燒火的の常は火を燒山巡りの常は山を巡る既も燒火的とあり亦出て山を巡る者なし行者曰く情の你未だ知すや大王我怠慢なく燒火的を勤しを見るは當般陸して巡山とあしるへり小妖曰く我門巡山的一班毎は四十名あり十班俱は四百名大王より個々お牌を與て號とあし

南無阿彌陀佛

四十一

るふ你其牌ありや行者曰く我怎生牌ありらん然も當般為牌を領して來れり又你也定て牌有べし疾出して我も看よ我も又汝も見せん小妖就ち衣服を掲げ一個の金漆牌兒を取出しけり正面は威鎮諸魔と四個の金字有て背は小鑽風の三個の金字あり行者是を見て倍の巡山的の都て風の字を下に附るからんと手を腰の間は指いれ一椀の毫毛を抜金漆牌兒と變つ背は小鑽風の三個の文字を露し取出して看ければ小妖大い驚き我等都て小鑽風と名を呼ぶ怎麼汝一個大鑽風といふや行者曰く大王既お我を的巡山に降しるは此新牌を賜り大鑽風と號て汝們一班の四十名を司せらしめるふ小妖是と聞て急ぎ拜して曰く長官倍の額に職を蒙りるへり我輩は長官の面を知ず當下の無禮を許しるへ我一班の鑽風等皆南嶽の下にあり我快く去て他們は報じ候ん長官慢々來りるへとて嶽の那邊へ跑り去行者小妖が首は從ひ南嶽の下に至れば果的一班の小鑽風爰に在て儂々身を屈て出迎へ長官は拜請す行者是を見て急ぎ機頭を登て座を定衆鑽風を對して呼つて曰く當般大王新お我を大鑽風に降しるはし謂れ今汝等も説話ん且定て聞べし近頃大王より來る唐僧を吃んと思ひるへど

汝等が中へ入り居て洞中の消息を伺ひ有んも計りたし此故に我を大鑽風に降し汝等が群黨中を查勘せしめるふ我今汝等も問事あり夫を答ざる的假鑽風あり提行て大王を訴べし汝們眞の鑽風も相違なく兼て大王の手列り知べし且速よ是を答よ此時一個の小妖進み出て曰く我等能大王の手列り知り一の大王の神通廣大にして能變化と云し法身を現し一度口を開きさるへば其廣き事城門のごとく一口は十万天兵を呑るふ二大王の鼻蛟竜のごとく假令鉄背銅身の人ありとも一度其鼻を卷る、時の終よ命を失ふあり行者曰く汝が言ごとく相違なし汝の眞の鑽風にして假鑽風に非ず亦一個の小妖上前出て曰く我も又禀すべし其次の三大王是に却て凡間の人非ず雲程万里騰と號しるは能九万里を飛行し又一件の寶具あり陰陽二氣瓶と号く倘此瓶中お人を裝入れば半時の間は化盡て血水とあるあり行者是を聞て心中は思やう妖魔が手列り怖るゝ不足唯此寶具の瓶を怖るべしと暗に驚きながら色にも出さずして曰く汝が言處違はず汝の假鑽風も非ず又一個の小妖進み出て曰く當般大王唐僧を吃んと思立るへども一大王二大王の却て是を要めるはす三大王強て彼を要めるふあり亦一個の小妖上前出て曰く三大王原此地の人に有す五百年前此西四百里隔つ舞駝國より來り彼國

の君臣百姓 盡く喰盡し因てりの城地を奪ひ居住するひし處近頃 唐朝より一個の聖僧
 を西天へ遣し經を求ると傳聞彼聖僧の十世修行の好人にて其肉を喰ふ者の不老長生を得と
 聞他を捉んと思へども他が徒弟孫行者神通廣大ありと聞て一個の力み及ばざれば爰も來つ
 て兩個の大王と血縁を結び力を合せて唐僧を拿んとするふあり行者曰く汝等が言ところ一
 件違はず先大王は此由を報じ亦來つて查勘を爲ん嚮ふ山を廻りし鑽風我も跟ひ來れ大王の
 見えさせ賞錢を賜ひ得すべし山ふて逢し嚮の小妖大い又懼る行者と列立一里計り過行處の
 行者忽ち鉄棒を把出し小妖を打殺す然して此小妖が像は變じ旗を掲げ鈴を敲け洞も尋ね
 行けるも果然一座の洞門あり門前に許多の小妖的群り居て行者が來るを見て小鑽風歸りた
 るり快く入て大王を見へよといふ行者應と一聲應へ直も門内へ入前面を看やれば堂上に三
 個の妖魔並び座兩邊に幾百の小妖伺候して個々甲冑を帶し器械を把威風凛々として殺氣騰
 騰たり行者些しも怖れず遂に堂下へ走り行ハ三個の妖魔問て曰く汝山を巡りて唐僧が消息
 を伺ひたるや行者曰く唐僧の未だ伺ひ得ず却て孫悟空を伺ひ來れり老魔曰く汝怎麼して
 孫行者を伺ひたるや行者曰く彼東嶺の那邊は一個の和尚洞の上へ蹲りて鉄棒を磨き居

たるが其像開路神のごとく若身を起さば十余丈の長有べし彼鉄棒も亦椀程の粗細あり他只
 管口裡に獨言を聞ひ我此鉄棒久く神通を顯さず今是を磨て洞中へ入三個の大王を打殺し一
 大王の皮を剝二大王の骨を切三大王の筋を抽假令門を閉て防ぐども我蒼蠅兒と變じて門の
 縫裏より潜り入他等を捉へ殺さんと云り我是も依て孫行者ある事を悟候ふ老魔是を聞て
 一身汗を流し二個の妖魔は對して曰く汝等さけ我曾て孫行者が武勇を聞及びしが果的斯の
 如く却て我等を討んとす他又蒼蠅兒も變じて來んと云我此洞中往昔より蒼蠅を生じたる事
 ゐし若蠅の來るを見れば汝等力を用ひて拿ゆべし必ず遁す事ありれ行者是を聞て一邊に身を
 退き密に一根の毫毛を抜て蒼蠅も變じ老魔の顔も向ひて放ち遣ければ老魔大い又驚き悟る
 と孫行者來りたれ快く拿へよと呼りつゝ個々鎗を把刀を振ひ小妖等も一齊に器械を取て版
 來り上を下へと立駭き蠅一雙を駭動するも行者好笑堪へりねて覺す吸々と笑ひけるが
 忽ち我眞の顔を笑ひ出し是を變じ正んとする間も彼三魔王目疾く是を見附急な行者を擒捉
 へ老魔も向ひ大哥々々是を見るへ遁断則ち孫行者あり想は遁断りの小鑽風を打殺し却て其
 模樣に變じて來し者あらん此時向魔を初め衆部の小妖ども一齊に立ち寄り遂に行者を引倒

し他遁法を知故又繩を以て縛ぐたし陰陽二氣瓶の中へ裝入て化し殺すの如じとて小妖等
ふ命じ陰陽瓶を取出させけるが此瓶纔ふ二尺四寸の大さなれども三十六個を用ひされバ動
ず事能す此故る三十六個の小妖彼二氣瓶を拵出し瓶の口を行行者の向ふれば瓶の中へ仙氣あり
て搜的行者を吸入たり三魔打侍て蓋を置ひ既へ孫悟空を捉たれば唐僧の自然と我門の口裡
の物ありと急ぎ歡喜の酒家を催しけり

繪本西遊記卷之五終

明治十六年三月三日御届

同年十七年二月出版

編輯人

出版人

青森縣士族 定價貳拾八錢
手塚盛壽
京橋區南箱町三番地青留
東京府平民 辻岡文助
日本橋區横山町
三丁目貳番地

一板垣君近世紀聞	三編 大尾	一水錦偶田曙	三編 大尾
一川千鳥天の網船	全	一綾重衣紋酒春秋	三編 大尾
一思案橋曉天奇聞	三編 大尾	一名廣澤邊萍	三編 大尾
一娘淨瑠璃噂大寄	二編 大尾	一腕競心の三侯	三編 大尾
一賞集花之庭木戸	六編 大尾	一格蘭氏傳發文營	三編 大尾
一新編伊香保土産	八編 大尾	一冬楓月夕榮	三編 大尾
一河内山網代乗物	三編 大尾	一席旗群馬嘶	三編 大尾
一高橋阿傳夜刃譚	八編 大尾	一庚申通夜譚	二編 大尾
一夜嵐阿衣花酒仇夢	五編 大尾	一聞多風流西洋床	三編 大尾
一國定忠次義名高島	五編 大尾	一戀相場花王夜嵐	三編 大尾

